

2016ドイツ指導者研修報告

(静岡県サッカー協会技術委員会)



■ Contents

1. ドイツ研修を終えて (学びと成果)
2. 種別育成活動への提言(3種、4種、GK)
3. 曜日別レポート
4. 事前研修レポート
5. 資料

■研修参加者および日程

No.	役職	氏名	所属チーム	所属校
1	団長	池谷 孝	清水エスパルス	
2	研修責任者	武田 直隆	静岡市立高校	静岡市立高校
3	研修員	横尾 達哉	F C . L E S T E	
4	研修員	小枝 善憲	静岡県立浜松西高校中等部	静岡県立浜松西高校中等部
5	研修員	牧野 安正	O I S C A F C	
6	研修員	横山 勝也	静岡トレセン	静岡市立蒲原西小学校

	日付	都市	時間	日程
1	8/20 (土)	名古屋 ヘルシンキ デュッセルドルフ	10:30 16:30 17:55 18:20	中部国際空港発 ヘルシンキ空港着(14:40) ヘルシンキ空港発 デュッセルドルフ空港へ デュッセルドルフ空港にて瀬田と合流し、タクシーでホテルへ デラク・リビングホテル到着、チェックイン、瀬田を交えて夕食へ
2	8/21 (日)	デュッセルドルフ デュイスブルク	11:00 15:30	【フォルトゥナ U19 vs. シャルケ U19】試合観戦 *フォルトゥナ U19 に伊藤達哉所属 ドイツ杯【MSV デュイスブルク vs.ウニオン・ベルリン】試合観戦
3	8/22 (月)	デュッセルドルフ デュッセルドルフ	午前 午後	【フォルトゥナ・デュッセルドルフ】アカデミー練習視察 【フォルトゥナ・デュッセルドルフ】アカデミー講義 デュッセルドルフ・シュトゥツプンクト(トレセン)視察
4	8/23 (火)	デュッセルドルフ シャルケ	午前 午後	【フォルトゥナ・デュッセルドルフ】トップチーム練習視察 【FC シャルケ 04】ユースアカデミー練習見学
5	8/24 (水)	レバークーゼン デュッセルドルフ	午前 午後	【バイヤー 04 レバークーゼン】トップチーム練習見学 【フォルトゥナ・デュッセルドルフ】アカデミー練習視察 練習後、フォルトゥナ・デュッセルドルフ U18 監督と夕食
6	8/25 (木)	デュッセルドルフ ケルン	午前 午後	デュッセルドルフ市内 DFB 認定エリート学校視察 ケルンへ移動、市内散策 【フォルトゥナ・ケルン】アカデミー練習視察 視察後、フォルトゥナ・ケルン U15 コーチの杉崎氏、落合氏と夕食
7	8/26 (金)	デュッセルドルフ ボーフム	午前 18:30	デュッセルドルフ市内散策・観光 【VfL ボーフム vs.ハノーファー 96】試合観戦
8	8/27 (土)	ケルン ケルン	午前 15:30	【ガイスボックカップ】E/F ユーグントサッカー大会視察 【1.FC ケルン vs.ダルムシュタット】試合観戦 *1.FC ケルン育成 GK コーチの田口さんとミーティング
9	8/28 (日)	ドルトムント	11:00 夕方	【ボルシア・ドルトムント】U17/U19 試合視察 * 午後に試合観戦に行くクラブのアカデミーチームの試合 フリー
10	8/29 (月)	デュッセルドルフ ヘルシンキ 名古屋	9:30 11:50 17:15	ホテルチェックアウト、タクシーでデュッセルドルフ空港へ デュッセルドルフ空港発、ヘルシンキ空港へ ヘルシンキ空港発、中部国際空港へ
11	8/30 (火)	名古屋	8:50	中部国際空港着

1. ドイツ指導者研修を終えて

池谷 孝（指導者養成委員長:清水エスパルス）

I . 地域密着と選手育成の成功

ドイツが1998年フランスワールドカップ、2000年のオランダ・ベルギーでのユーロで惨敗を喫して以来、迅速な育成改革による刷新と代表選手の若返りの成果が2014年ブラジルワールドカップで結実し今現在最高レベルのサッカー大国であることは周知のことです。

ドイツに行って瀬田さんからレクチャーを毎日受けてわかったことは、ドイツのサッカーは（サッカーに限ったことではないですが）アマチュアリズムから生まれ現在もその健全な精神の下、多くの（クラブ会員の）人々の生活の一部、人生を楽しむ拠り所となっているということです。

行く先々、各町々にクラブがあり、そこに老若男女の選手が通い活動することが源流となって、プロに至るまでのドイツのサッカーを支えていることがよくわかります。クラブのアイデンティティを共有する人をたくさん創出することこそ地域密着であり、その文化がサッカーを支える広くて厚い裾野になっています。

選手たちは、その能力にあった環境でサッカーをプレーし、そこにドイツ協会のトレセン制度が発掘、育成に有効に働き、タレントは自然とプロクラブであるブンデスリーグの育成組織に入ってより質の高い教育とトレーニングを受けています。クラブ、ドイツ協会、ブンデスリーグの三位一体ということでしょうか。誰もがサッカーを楽しむ、みんなで選手を育てる、という健全でおおらかな精神を感じますが日本はどうなのでしょう？！



II . 学校クラブ（部活）のストロングポイント

教育とサッカー指導は育成年代のサッカー選手に欠かすことのできないものです。教育とは人間教育、学業教育、キャリア教育の3つを指します。例えば、フォルトゥナ・デュッセルドルフは2つのエリート提携校(全体では4つの提携校)を持ちクラブからスタッフ・指導者を派遣して選手のトレーニングや学校生活全般のケアを行っていました。しかし、それと比しても日本の学校クラブはとてもよくできたものだと思われました。

日本の学校は、サッカー指導も、学業指導も、生活指導や相談、医療体制まで整っています。これはプロクラブであるJクラブの育成組織より全体的な強みです。

タレント、指導者、指導人数、施設の4点の条件の内、タレントの獲得に関しては難しい側面を持ちますが、グラウンドがあって4時からライセンス指導者の下、質の高い練習ができるのであれば、グラウンドがたとえ土で、活動人数が多少多くても非常に優れた育成ができる可能性を持ちます。

そして、4点の条件の内一番動かすことが可能なのは指導者自身の指導力です。指導者が意欲を持って学び、よりよい指導をすることで学校クラブの可能性は大きく広がります。学校クラブの指導者にそのストロングポイントを強く生かしてもらいたいと思います。

III . チャンスは常に、いまだ

指導者として、サッカーの、トレンドや変化している部分、逆に昔と変わっていない2つの部分を見ましょう。そして、指導者はやはり選手が楽しいと感じてプレーすることを最優先しましょう。楽しいと感じる源流はストリートサッカーであり、ゲームをすることです。練習は

ゲームから逆算した基礎基本を教えることだと思います。

IV. 温故知新（サッカーを教えるとは…ドイツの地であらためて思ったこと）

サッカーの基本

＞ゴールを奪う、ボールを奪う。楽しいからうまくなる。



指導者は何を作るか、動かすか

＞3点…メソッド・コンセプト、指導力、メニュー力

何を伸ばすか

＞選手の個の幹を太くするための、

テクニック（技術・視野確保）、強み、主体性、よい姿勢（体幹・首）

＞プレーのクオリティを上げるための、

正確性(accuracy)、スピード(tempo)、タイミング(moment)、強さ(intensity)

ドリルにリアリティを持たせるためのキイ

＞プレーの正確性(accuracy)、プレースピード(tempo)、タイミング(moment)

何を構築するか…プレーヤーズファーストの組織

＞学校クラブ・町クラブ、サッカー協会、Jクラブの三位一体の組織

サッカー発展のキイ

＞競技人口、タレント発掘、育成環境（拮抗した試合環境・競争）、指導の質

「障子を開けよ、外は広いぞ」

＞百聞と一見、どちらも欠かせない。

＞生の情報を自分の目でみて自分のものにするための投資こそ

インテリジェンスを発揮せよ

＞知能(ものを考える力)+情報収集+経験値+イノベーションのサイクルを回す

みんなの力で、ひとりの力で

＞一人でも出来ることがある。しかしみんなをやれば何倍もの成果を生み出せる

V. Every adventure requires a first step…国際感覚を磨く

フォルトゥナ・デュセルドルフの瀬田元吾さんにあらためてお礼申し上げます。ベンツではなく(笑) フォードでアウトバーンを160KMで毎日3時間4時間運転していただきながらメンバーは助手席に交代交代で座り濃密なレクチャーを受けることができました。真摯で意欲的にドイツサッカーやドイツ全般について教えていただきました。

表題の言葉は宿泊した DERAG LIVING HOTEL のロビーにあった不思議の国のアリスの中の言葉だと思います。参加者の皆さんが今回の成果を生かし、ますますサッカーを好きになって子どもたちにその恩恵をもたらしてくれることを期待します。新しい一歩を踏み出してください。最後に、関係各位にお礼申し上げます。

武田 直隆 (コーチングスクールスクールマスター:静岡市立高校)

成果と課題 (種別向けレポートも含めて)

■強いシュートとゲーム

サッカーW杯アジア最終予選をアラブ首長国連邦 (UAE) にホームにて1-2で敗れ、敵地でタイを2-0で下して初勝利を挙げた日本代表。UAEに逆転を許した初戦から2試合を通じて、決定力不足という長年の課題を露呈。(2016.9.8.静岡新聞、朝刊より)

私自身ドイツへの研修は、今回が3回目であり、この研修を通じて日本国内、静岡として取り組むべき道筋が少し見えたものとなった。初めてのドイツ研修(2006年)では、U12年代のゲーム視察の中で、一人ひとりの個人戦術が徹底されており、選抜チームであってもスムーズなゲームが展開されるゲームを観て、日本とは違う印象を持った。また、ドイツ人コーチが指導者対象に行ったクリニックでは、ドリルトレーニングとシュートトレーニングを行ってくれたことを思い出す。その際、コーチは「今日は強いシュートがテーマだ」と言っていた。巻いたシュートではなく、強く打つことにフォーカスしていた。当時は、その意図は深く理解できていなかったが、今回U-8~Topレベルのトレーニング、ゲーム視察、レクチャーを受けたことで繋がる部分があった。



2回目の研修(2015年)は、ボルシアMGを中心に視察した。ゴール前のトレーニングやシュートのトレーニングを多く見ることができた。ワンタッチパスのクオリティの高さに驚き、日々のトレーニングの積み重ねの重要性を再認識させられた。事後研修レポートには、4つの提言をさせてもらった。①毎日のトレーニングの中にパス&コントロール&シュートを入れましょう。②コーチが週に1~2回はGK専用のトレーニングをしましょう。③上手い選手の基準を持ちましょう。④より多く得点を獲得の選手にスポットを。

そして3回目となった今回の研修では、大学時代の後輩でフォルトナ・デュッセルドルフ日本デスクとしてドイツの地で活躍されている瀬田元吾氏に研修の全てをコーディネートしてもらった。彼との話の中でも、ドイツ人のシュートの精度とGKのクオリティの高さが話題となった。U12までのトレーニングやゲームの中で軽量級(5号)を使うことを聞いた。確かに、視察に行くクラブには5号の軽量級(※写真参照)を使っていた。その理由を聞くと「ボールが軽くて飛ぶから積極的にシュートを打つ」そして「ゴールに決まる感覚を小さい頃から持てる」と言っていた。視察したトレーニングやゲームの中ではペナルティーエリアの外から力強いシュートが決まる光景を何度も見るようになった。源流を辿ると小さいうちからネットを揺らす喜びや楽しさを感じてドイツの子どもたちはボールを蹴って育ってきていることに気づかされた。

さらに、今年度1回目のコーチングスクールでの、U11静岡県選抜のタイ遠征報告書の中には「決定力不足が目立った。キックの質はもちろんだが、それだけが全てではないように思う。」「相手GKの能力は全体的に高かった。」「GKとの駆け引きが不可欠ではないかと思う。」を示されていた。

やはり、シンプルなところになるが、ボールを奪い、ゴールを守る。ボールを保持し、ゴールを奪うといったサッカーの目的からも、まずは強いシュートを打つことからスタートするという考えも必要ではないかと感じた。永遠の課題とされる決定力不足のヒントがドイツの育成環境にあるように思えた。

ゲームに関しては、アマチュアクラブ(FCブーダリッヒ1902)で行っていたU10のトレーニングが印象的であった。それは、9対2のGKからの組み立てのトレーニングである。GKからDF→MF→サイドへ展開→クロス→シュートといった流れのトレーニングである。4種年

代からゲームからの逆算の考えでトレーニングしているのだと感じた。日本では、積み上げ式が多いのではないかとも思った。その後、違うピッチで行われていた U11 のトレーニングマッチを視察した。するとそこで展開されていたサッカーは、団子サッカーにならず、システムマッチではないが一人ひとりにポジションがあり、パスもドリブルも判断があるサッカーであった。コーチ陣の声掛けも前向きで、ハーフタイムもポジティブな雰囲気伝わってきた。U10 のトレーニングと U11 のゲームからドイツサッカーの日常を感じることができた。

4 種年代でのドリルトレーニング（ドリブル、グラウンダーのパス&コントロール、強いシュート）とゲーム（個人戦術とサッカーの仕組みを含めた）を静岡県サッカー協会として石井ユースダイレクターから発信して頂けたらと願います。この研修の成果が 5 年後、10 年後の静岡サッカーに生かされたらと思います。

※トピック(軽量級5号)



■タレントの発掘とトレセン活動

ドイツサッカー協会が 2000 年にシフトチェンジ（改革）を行った。（1990 年イタリア W 杯優勝、1998 年フランス W 杯ベスト 8、2000 年ユーログループリーグ敗退）「このままでは世界に取り残されると」危機感を覚え、屈強なフィジカルと不屈の闘志で勝利をもぎ取るパワーサッカーを標榜していたドイツは世代交代に失敗した経験から、若い世代の育成と、技術に裏打ちされた創造性の高いサッカーの必要性を痛感し、大規模な改革に着手することになった。

その特徴は、ドイツサッカー協会とブンデスリーガ（リーグ）、そして各クラブの間で綿密に構築された相互協力体制にある。（下記 図 1）

まず、協会が全国に育成拠点を設置し、専門的な教育を受けた指導者を派遣。才能の発掘やエリート教育の土台を敷くと同時に、育成に定評のあったフランスからノウハウを積極的に吸収した。

リーグも同じ方針のもと、1 部と 2 部の合計 36 クラブ全てにユースアカデミーの設置を義務付け、裾野の広い育成基盤の構築を後押しした。また、2006 年の W 杯開催地がドイツに決定したことを受け、スタジアム改革にも乗り出した。陸上トラック付きの競技場は次々とサッカー専用スタジアムに姿を変えた。

チケット代金そのものを低価格化したほか、専用プリペイドカードを発行してスタジアム内をキャッシュレス化したり、チケット購入者がスタジアムに来るための公共交通機関の利用料を無料にしたりするなど、観客の目線に立ったサービスを矢継ぎ早に繰り出していった。

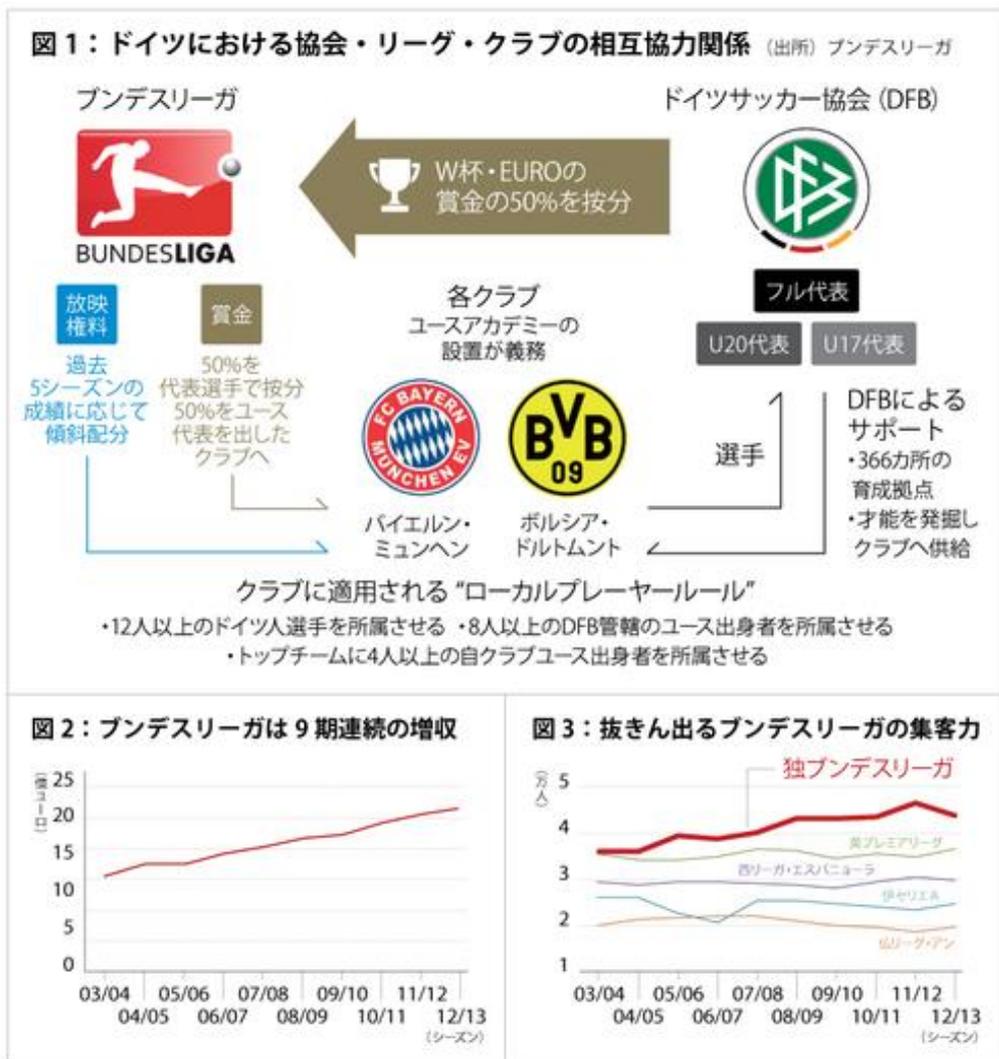


図2：ブンデスリーガは9期連続の増収

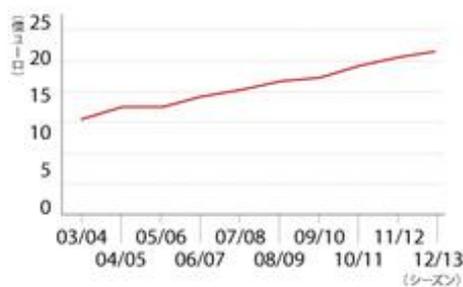


図3：抜きん出るブンデスリーガの集客力



参考文献：Wedge 9月号参照

タレントの発掘と指導がドイツサッカー協会とブンデスリーガというお互いの組織間で整備されている。私自身も1、2回目のドイツ研修や書籍等で366のトレセン（シュトゥツプンクト）が50km圏内にあり、46のプロクラブとの密なネットワークにあることは何となく理解していた。今回の研修では、DBFトレセンコーチであるシュルター氏のレクチャーから、これまでにミロスラフ・クローゼ（7部）カカウ（6部）といった代表選手が大人になるまで発掘されずにきた流れを知った。この反省からドイツ中のタレントを見つけて、十分な教育を与えるシステムがドイツでは確立されている。

日本では、すでにJリーグのユースアカデミーに所属しているU12～U15の選手や町クラブの選手をナショナルトレセンとして日本サッカー協会のトレセンコーチが指導している。ドイツではブンデスリーガ所属チームが育成ピラミッドの中央の柱となっている。しかし、日本ではJリーグチームが中央にはない。（下記図2、3）また、静岡に置き換えてみると今年のU16静岡県選抜の16名の選手の内、U12時代にスペインへ海外遠征（U12静岡県選抜）に参加した選手は2名であったという報告があった。様々な捉え方や考え方があると思うが、静岡県のタレント発掘や継続的な育成に関して選ぶ側の目や基準作りなど今後の議論の場が設けられればと感じた。

図 2(日本サッカー協会 HP より)

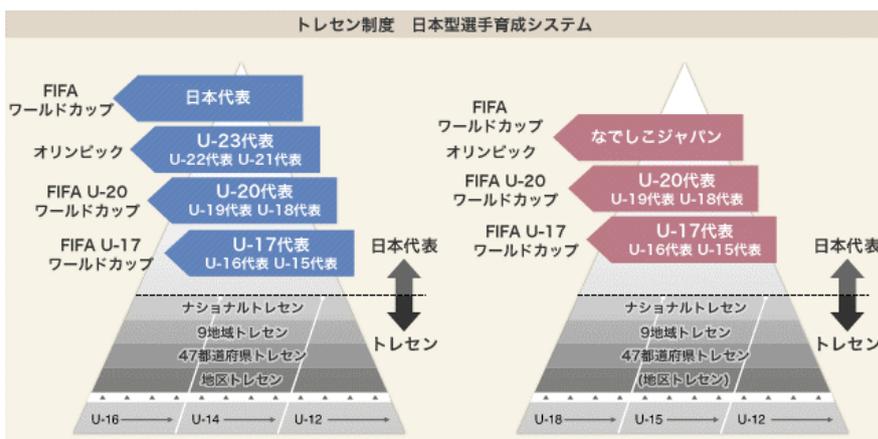
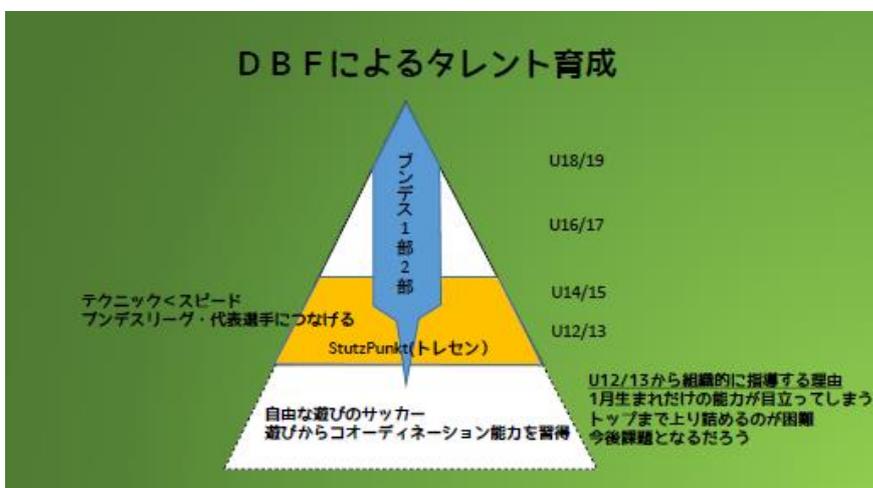


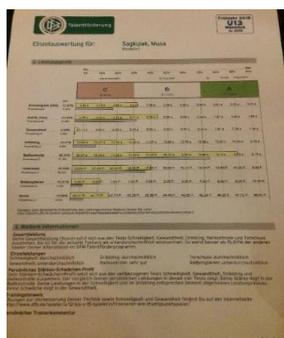
図 3 (池谷氏報告PPより)



※トピックス

- ・ドイツでのトレセン活動＝個人を伸ばすトレーニングが目的となる。
 - ・評価をデータ化する。A、B、C
 - ・スピードは数値化できる。テクニクは主観も入る。
 - ・トレセンでは、グループ戦術まで+1対1の強さは絶対条件
 - ・映像を活用し、早いプレスの為のポジショニングを教えることでFWの理解力を高める。
 - ・トレセンコーチは契約の中に週1のトレーニングや年間30試合の視察が含まれている。
 - ・フェライン→トレセン→プロクラブ→地域選抜→U代表→フル代表
- ※Verein (フェライン)：公益を追求する団体組織。NPOとも理解できる。

選手の評価シート



FWのプレスに関して



※トピックス(ゲーム視察から)

ドイツ杯 ユニオン ベルリン VS MSV デュイスブルグ

2部 VfL ボーフム VS ハノーファ 96

1部 1Fc ケルン VS ダルムシュタット

- ・球際の激しさがある。ショルダーチャージ（間合いが日本より近い）
- ・GKのクオリティが高い。(W-up ではブロックングのトレーニングを行っていた。)
- ・CKの守備の際には全員が戻っていた。
- ・ビルドアップは両CDFが開き、⑥CMFが落ちて来て組み立てをする。

州で分けられたリーグ戦 U19 フォルトナ・デュッセルドルフ VS U19 シャルケ

U17 フォルトナ・デュッセルドルフ VS U17 シャルケ

- ・GKからの切り替えでカウンターを狙う
- ・球際の激しさあり。審判の基準も明確。
- ・パスを出して走る。スピード感がある。力強さがある。
- ・一人ひとりの姿勢（立ち姿）が良い。
- ・シュートは振り切る。大きく枠の上を超えるシュートは少ない。

■まとめ

今回の研修は、様々な人の繋がりによって多くの学びや発見があった。サッカーはシンプルなものであり、ドリルトレーニングで基礎基本を高め、ゲームでサッカー感を高めていることを確認できた。

また、基本的な戦術をU12～U15年代で教え込んでいる点は日本との違いであると感じた。

フォルトナはU18のチームを作り、可能性のある選手、遅れて成長する選手をケアしている特徴があった。それは近隣にシャルケやレバークーゼンといった資金的にも潤沢なクラブがあるため、フォルトナは独自に育成するシステムを持っている。レクチャーの中でも、「選手自身が一番大切なトレーナーである。自分が目指すものを問いかける。トレーナーはそれを伸ばす存在である。」個の成長を考え、トップチームへ毎年2～5人上げることが理想であると言っていた。クラブの立ち位置、哲学、指導者自身の姿勢が、選手、チームの成長に繋がる。このことは自チーム、静岡県にも当てはまるのではないかと感じた。今後も常に学びを怠らず、サッカーに関わる中で今回の研修の成果を生かしていきたいと思う。

最後に、今回の研修を数か月に渡って準備し、10日間のアテンドを完璧にコーディネートしてくれた瀬田元吾氏に感謝します。そしてドイツの地で12年目になっても挑戦し続ける姿勢に刺激をたくさん受けました。ありがとうございました。

牧野 安正 (3種:オイスカSC)

研修の目的

自分の中で「百聞は一見にしかず」をテーマに、昨年は、オランダで学ばせていただき、今年はドイツへの研修をさせて頂けることになり、静岡県サッカー協会には心より感謝申し上げます。

出発前に自分の中ではっきりさせたことは以下のことです。ドイツ研修のはっきりとした目的を持つこと。世界レベルのサッカーを感じる。自分の目でしっかり見て、聞いて、なんでも吸収することです。

また、限られた時間の中で、ドイツサッカー協会の取り組み、育成システ



ム、育成環境、学校教育などを理解し、自分のサッカー観や、日本の学校やチームに参考になること、生かすこと。仲間を増やしフィーリングを合わせていくこと。

研修の成果

ドイツのゴールキーパーのレベルは世界クラスだということを目の当たりにしました。なぜか？

ドイツの子供達は、軽量球を使用して、ペナルティーエリア内外から強いシュートを打つ。強いシュートを沢山打つから、キーパーも日常的に上手くなります。

オリバーカーン、ノイヤーといったタレントが人気であることGKは花形のポジション。フィールドプレーヤーで活躍する選手がキーパーを選択していくことに日本との差を感じる事になりました。

フォワードは強いシュートがゴールすればその感覚も自然に身に付いていくこと。(習慣)自分のジュニア年代では、シュートを打つ感覚がコースを狙うよりも、強いシュートをどこからでも打つ方が良いのかと考えさせられました。(どちらも継続性が必要)

日常のトレーニングはシンプルで、ドリル時間は短く、選手が生き生きプレーしている様子がどこのチームでも観て伺えました。(指導者の良い立ち振る舞い、熱意)を感じました。

ドイツのエリート学校のフォルトナ・デュッセルドルフスクールコーディネーターのラッシュ氏の話を聞いて、日本の学校の施設、部活も世界に通用している所もありました。それは学校のサッカー部の先生が協会ライセンスを取得し、勉学、進路、サッカーを指導できる環境があることです。学校教育でも、タレントを育成し、良いトレーニングをして、選手に思考させて、次のステージにうまくバトンタッチしていければ可能性は、あると感じました。

フォルトナ・ケルンU-19のゴールキーパーコーチ落合氏からピリオダイゼーションの話から、トレーニング強度、フィジカル、体幹など、どう組み込むか、いつからか、どのようにやるかなどを学ぶことが出来ました。

2017年までのドイツサッカー協会(DFAモバイル)の取り組みの話にも興味を持ちました。

チームに指導経験のない、または少ない指導者に、地域の協会インストラクターが出向き細かい指導内容を教えてくれるシステムがあるとのこと。

今は、フィールドプレーヤーのみですが、近い将来キーパーモバイルもできる予定だそうです。

まとめ

今回の研修で多くの出会い、発見、驚き、学びがありました。指導者としてとてもワクワクしています。

このドイツ研修にはいくつかの答えがありました。今回アテンドして下さいました瀬田元吾氏には、すべてのことをして頂き心より感謝申し上げます。静岡県サッカー協会の皆様にはこの研修を与えて頂き大変感謝しております。また池谷養成委員長、武田コーチングスクールマスター、共に学んだ3名の研修員の皆様にも心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

横山 勝也 (4種:U12県トレセン)

■学びと成果

○ドイツのサッカー文化

広い敷地にフルピッチが4面以上、木々に囲まれた環境の中で、子どもたちがサッカーに親しんでいる。その様子を施設内にあるレストランや芝生で家族がのんびりと応援している。サッカーに対するゆとりが感じられた。日本のように必死に応援し、コーチ陣にクレームをいう様なことはなかった。

フォルトゥナU17のリーグでは、多くの老若男女が観戦に来ていた。地域のチームをカテゴリー関係なく応援しようとする土壌があった。これが、ブンデスリーガでの熱い応援につながっている。町をあげての応援、試合は町VS町の様相を呈していた。静岡(清水)にはかつてドイツに似たように地域が地元少年団を応援する気運があった。

しかし、現在では多くの少年団やクラブチームがあるが、地域をあげて応援しようとする状況でない。少年団でもクラブチームでも地域に根差した活動が必要だと感じた。



○トレセン制度(シュシュットポイント)とブンデスリーガユースアカデミー

ドイツには366か所のシュシュットポイントがあり、1つ1つの距離は50km離れていない。スカウティングは各リーグ戦を視察し、1000名から100名に、その100名から15名を合格させる。常に情報を得て、良い選手がいれば、視察に行くというネットワークが確立されているため、選手を見落とすことがない。

また各シュシュットポイントではAライセンス以上(エリートライセンス)所持者が所属しており、町クラブからユースアカデミーにつながる指導を行っている。

DFBの育成プロジェクトを浸透させるため、指導者講習会を開催している。

選手を見逃さないネットワークと選手を育成したラレントを育成することができる指導者を育成していきたい。

4種コーチングスクールとして、「静岡らしさ」を追求するために、各チームが「静岡のサッカー」をベースに指導し、そこで育ったラレントをトレセンやプロのクラブチームで育成できるよう、指導者講習会を開催していきたい。

○個の戦術の重要性

試合での勝利を目指すとチーム戦術が優先され、トレーニングが複雑になり、結果、他のチームや進学した先のチームで対応ができなくなる。オートマチックな選手を育成していくためには、個人の戦術を学ばせなければならない。ドイツでは1VS1~4VS4のトレーニングを育成年代に徹底的に行うことで、個人技術だけでなく、味方や相手を観ながらのプレーやボールのもらい方や位置まで自分なりに考え実行できる。この積み重ねがあるため、ブンデスのゲームでもチーム戦術を中心にプレーしながらも、状況に応じて、自己判断でき、1VS1の場面などで強さが引き立って見えると考える。

ボールの速さ、判断の速さ、視野の確保など、個人戦術にフォーカスして指導をしていく必要があると感じた。

■トピックス

○ツヴァインキャンプ

キッズからブンデスリーグの1部までを観させていただき、カテゴリー毎の違いはあるが、どのカテゴリーにおいても1VS1の局面の強さは変わらなかった。

ドイツが低迷時代から世界一になった大きな変化がモダンサッカーの導入といわれているが、根底にあるツヴァインキャンプウの精神は大きなウエイトを占めている。前述したように静岡でも個人戦術を重視していきたい。

○エリートシューレ

ドイツではプロクラブと学校が提携し、選手を両輪で育てている。

日本では中学から部活動が始まるが、現在はクラブチームに人気があり、U12までトレセンで活動していたほとんどがクラブチームに在籍し、学校との連携は取れていない。心身ともに大きく変化する年代において、教育とスポーツが連携していくことが重要である。

日本のシステムを変えていくことは難しいが、学校の教員とクラブのコーチが連携することは可能だと思う。できれば、クラブチームから学校へ発信できると良いと思う。3種年代のクラブやチームに投げかけていきたい。

■終わりに

今回、育成世界一のドイツで4種に特化した海外遠征を組んでいただき、国内では感じることのできないサッカー文化を肌で感じることができました。クラスルーツからブンデスリーグまで、確立されたビジョンのもと、サッカー指導が展開されていることを認識することができました。いかにグラスルーツ世代・U12世代が将来に向けて重要か、その積み重ねがブンデスにつながっていく。各カテゴリーのトレーニングを視察させていただき、実感できました。日本において、いや「サッカー王国静岡」の再建に向けて4種年代・キッズの垣根を越えて、個人戦術（個人技術）を高めていきたいと思えます。

最後に、この素晴らしい研修を池谷様をはじめ、コーチングスクールマスターの武田様のご尽力で実施できたことを感謝いたします。

また、細部にわたり、時間をかけてドイツサッカー文化・ドイツサッカーの仕組み・ドイツサッカーのフィソロフィーについて現場を基準にご指導ご説明いただいた瀬田様に心より御礼申し上げます。

小枝 善憲 (3種:浜松西高校中等部)

■学びと成果 (今後に向けた成果と活動内容)

今回のドイツ指導者研修に参加して一番学べたことは、教えるべきことは3種年代までに確実に教え込むことが大切であるということである。サッカーは選手が主体的に行うスポーツであるという前提のもとに日本では「選手に考えさせる」ことが大事であるという指導方法が最近では実践されていると思う。しかし、研修中のU-9～U-17世代の指導者たちは、例えば、守備のとき、右を切るのか左を切るのかを明確にその状況に応じて指導していた。「そんなことをしたら、選手は自分で考えることができなくなってしまい、試合中には思考停止してしまう」という心配もあるかもしれないが、基本原則を教えた上で、選手たちが選択肢を自分で選択す



るという一連の指導の流れをつかむことができた。そのためには、指導者が自分のはっきりとしたサッカー感を持つことが大切であると感じた。

また、様々なチームの練習を見学することができたこともとてもプラスになった。特に、フォルトゥナ・デュッセルドルフU-17とシャルケ04U-17の普段の練習を見た上で、週末のリーグ戦を試合観戦できた点は、それぞれのチームがどのような試合に向けてのコンセプトをもって練習を行い、試合でどのようなパフォーマンスを発揮するかという点について、見ることができて勉強になった。例えば、シーズン開幕直後であったため、フォルトゥナ・デュッセルドルフは前線からのチェイシング、縦パスへのスライドからのアタックという守備を徹底して練習していた。一方で、シャルケ04は縦パスを当てたあとのサイドへの展開スピードを上げる練習を行っていた。お互いのチームがそれを徹底して試合で実践をしていた。タレントの力による打開もあったが、今回はシャルケ04のパスサッカーのスピードがフォルトゥナ・デュッセルドルフのチェイシングからの守備を若干勝っていたゲームだった。それでも、お互いが実践したいサッカーが展開できていてとても見応えがあった。指導者が選手に何を望み、実際に試合で実践させるのか。それは、指導者の指導力の賜物であると感じた。今後の指導に生かしたい。

■トピックス

今回の指導者研修をコーディネートしていただいたフォルトゥナ・デュッセルドルフ、フォルトゥナ・ケルン、ケルン体育大学等に在籍していた様々な日本人がサッカーというスポーツを通じて、好きなサッカーに情熱をもち、異国の地で努力している場面に何度も出会う機会があった。選手も当然だが、フロントや指導者として海外で研鑽を積んで、その経験を日本に持ち帰って日本のサッカーを強化したいという意気込みが感じられた。自分も彼らの情熱に負けないように、今回得られた経験を生かしながら自分の指導力を向上させていきたいと思う。

最後に、今回のコーディネイトを綿密に計画し、自ら参加者の要望に親身に対応してくださった瀬田元吾氏に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

横尾 達哉 (4種:FC. LESTE)

■学びと成果

一番驚かされたのは、やはりGKの能力の高さでした。観戦した1部から3部、全てのチームでGKの存在の大きさ、勝敗を大きく分けるポジションであることを改めて感じました。

日本では、なかなかポジティブな存在ではないポジションであるが、ドイツではジュニア年代から非常に大切にされていると思いました。その様子は、選手のプレーを見ることで明らかであり、ジュニア年代からゴール前に立つことへの自信やプライドを感じさせる選手が多くいました。ジュニアユース年代以上では、必ずGKコーチのもとトレーニングを行っており、必要な考え方やプレーを身に着けるべく励んでいました。

日本とGK先進国の違いで、体格の違いやグラウンド面の部分を多くの方が挙げるが、要因の一部でありすべてではありません。必ずどこか追いつく時が来るのではと考えています。皆がベクトルを合わせ、丁寧な指導、ポジティブな環境をつくることで世界基準に手が届く選手を静岡から輩出できると思います。

また、ドイツのクラブの指導者は、仕事をしながら選手たちの指導にあたる方が多く、沢山



のマンパワーで成り立っています。多くのボランティアで支えられている点では、プロクラブを除き、日本の現状も大きく変わりません。しかし、日本のサッカーとドイツのサッカーとは成果が大きく違います。

同じことを行っても基盤となる部分や想い、クラブの存在する意味が違えば進む方向が変わり成果も大きく違ってきます。

ないもの強請りをするのではなく、今自分たちの周りにあるもの、想いを持った人たちで上手に繋がり和を広げていくことの良さを感じました。

多様性を持ちながら、一貫性を失わない、矛盾するようで矛盾しない道を進むことは非常に難しいことではありますが、今一度、方向性を示し合わせて、進む道を探すときが迫られているように感じました。

最後に10日間のコーディネート、現地での同行、通訳まで全てにおいてご尽力賜りました瀬田様には、深く感謝申し上げます。簡単には見ることのできない、そして聞くことのできない内情を知る機会をくださりました。本当にありがとうございました。



ドルトムントにて



シャルケにて

2. 種別活動への提言

4種への提言

横山 勝也(文責)

■NEW「静岡らしさ」を構築するために

○目の前の勝利よりも子どもの将来を見据えた指導＝育成

日本同様、ドイツでも各年代ごとにリーグ戦が組まれ、切磋琢磨し、選手を育成している。ゲームに勝つことは子どもにとっても大切だが、勝つことだけを目的として、子どもの心身の成長に関わらず、ゲーム戦術を教え込むのではなく、成長にあわせた個人戦術を育成することにより、タレントが育成される。同じリーグ戦を行うとしても、育成をベースに取り組むことで、個を育成することができる。

○基本的な指導の温度差をなくす。(C級メニューの徹底)

ドイツのトレーニングはブンデスの下部チームも町クラブのトレーニングも、選手の力に合わせたオーガナイズ・メニューを組んでいた。DFBの育成プロジェクトの長期的なビジョン

がすべてのチームに浸透しているためである。

○攻撃面を優先した1VS1

ツヴァインカンプウ（1VS1）がドイツサッカーのベースである。ジュニア年代はドリブルで仕掛ける。フェイント、方向転換、シュート、ヘディングなど、攻撃面を重視したトレーニングを行うことで、1VS1が強くなる。良いOFを育成することで良いDFが育成される。

ドリブルも相手を抜くためではなく、ゴールへむかうための手段としてスペースへ運ぶテクニック。

○選手のパーソナルを知る

技術的（テクニック）はベースにあるが、その選手のパーソナルを知ることにより、トレーニングも個にフォーカスした指導ができる。

定期的なテストでパーソナルを数値化できる。

- ・ 20m走タイム（10m+10m）＝初速と中間速
- ・ ジグザグ走（アジリティ）＝ボールなし・ボールあり
- ・ パス&コントロール
- ・ コース限定したシュート
- ・ リフティング8の字

■グラスルーツへのアプローチ

○サッカーを楽しませること

町クラブのキッズ（U6）のトレーニングを見学した。トレーニングに参加している選手全員が一生懸命ボールを追いかけていた。日本で行っているフェスティバルのような場を設定し、短時間で楽しみながら様々なボールの扱いを経験すること、友だちと常に競争させることでストリートサッカーへの道が開けていく。

○自己肯定感を育てる。＝思考の面

育成年代（特にジュニア）のトレーニングで、コーチが大きな声で指導している場面には一度も出会わなかった。フォルトオナのU18アンドレアス・ポレンスキ（Andreas Polenski）氏との会談の中で、選手にチャレンジされること、そのチャレンジの結果から何を得るかが選手の育成には大切だと教えていただいた。思考面・技術面において今何を育成すべきかをコーチがしっかり理解しているからこそ、子どもたちは自信をもって取り組むことができる。自己肯定感を高めることができる。

○「GEIBBOCK CUP2016」を視察して

- ・ 各地区のU9・U10が集まり、リーグ戦を行う。
- ・ ブンデスの下部組織も参加
- ・ 7人制
- ・ 大会というより、フェスティバル（お祭り）のような雰囲気
- ・ 選手もスタッフも観客もサッカーを楽しんでいた。
→出店も出ている。
- ・ 日本でお団子サッカーになりがちであるが、自然とピッチに広がり、1つのボールをみんなを追うというプレーはなかった。ポジションを固定しているわけではないため、それぞれが自分の判断でプレーをしている。その中には1VS1の場面、2VS2の場面があり、スペー

スを使い、早いパスが展開されていた。

- ・また、ゴールへの意識が共有されているため、少しでもチャンスがあればシュートを狙うし、そのための効果的なパスも多く見られた。判断も速かった。
- ・GKも積極的にに関わり、距離感・幅。深みが子どもたちの判断で作られていた。

■地区トレセン・県トレセンで行うこと

- ・タレントの育成

「静岡らしさ」を構築できるように、セレクションで集められた選手をどのようにタレントに育てていくのかが、トレセンである。

では、どのように育成していくか。

- ・テクニック（個人戦術を含め）をベースに個のストロングポイントを育てる。

前述したようにテクニックが備わった選手が集まってくる。その高いレベルの中で個人戦術の精度を高め、ゲームの中でオートマチックに対応できる選手を育成していくためには、地区トレセンでは1VS1～4VS4に拘り、カテゴリーによって負荷を強めていく。

また、テクニックや個人戦術だけでなく、個人のパーソナルを知り、そこからストロングポイントを伸ばすことも行っていく。そのために、単純に比較できるスプリントやアジリティを定期的にテストしていくことも試みていきたい。

- ・ネットワーク作り

現在では年に3～4回の大会視察と2回のセレクションがトレセンの登竜門となっている。

しかし、そこには出場できない。または良い素質があるのに名前が上がらない選手が県内にはいる。その選手を見逃さないように、各チームとの連携を強め、その選手のトレーニングや試合を直に見て、トレセンに招集できるシステムを構築していきたい。

■まとめ

キッズ・4種年代では軽量の5号球を使用し、ボールをミートする感覚、しっかり蹴ると距離が伸びるが、ミートしないと距離が伸びないことを体感させていた。

日本では、ボールをもらう前に周りを見て、視野を確保し、コントロールする。そして次へつなげていく指導を行っているが、ドイツではどのカテゴリーにおいても「強いパス」を強調して指導していた。これば、強く、速いパスであればボールを受け取ってから判断する時間が生まれるということである。弱ければ、ボールが来る前に相手に寄せられボールを受けた時にはフリーではなくなり、イメージと変わってしまう。それよりも速くボールを受け取ることが大切だと分かった。

また、1VS1～4VS4の少人数でトレーニングを行うことで、選択肢を少なくし、(判断をストレスを軽くして)プレーさせることで、判断する力を育てることもでき、結果不必要なボールタッチがなくなっていく。ドリブルについてもゴールへ向かう手段としてのドリブルであり、目の前の相手を抜くためのドリブルではない。

パスやドリブル、コントロール、全てがゴールを狙い、ゴールを守るという2つの目的のためにプレーが組み立てられていることを実感できた。

これからの指導は少人数の中でもリアリティーのあるトレーニングを行い、個人戦術を高めていき、新しい「静岡らしさ」を実現できる選手を育成していきたい。

4種GKの指導についての提言

横尾 達哉(文責)4種県トレセンGK担当

- 報告対象 4種指導者、GKコーチ
- 報告内容 GKトレーニングとブンデスリーガゲーム視察、U9サッカー大会視察
- 場所
 - ケルンスタジアム
 - ボーフムスタジアム
 - フォルトゥナデュッセルドルフ練習場 U17～U23
 - フォルトゥナケルン練習場 U12～U15
 - シャルケ04練習場 U12～U19
 - 1FCケルン練習場 GEISSBOCK CUP

□視察内容

①各カテゴリーにおいて必ず担当コーチがおり、少数(1人～4人)でトレーニングを行っている。練習メニューとしては、ラダーやハードルを使ったコーディネーショントレーニング、複数のアングルからのシュート対応、その複合練習、クロスボールの対応などとどれも日本でも多く活用されているものであった。

ボールにプレーするために、ボールが来る前には止まり、ボールを見て、蹴られたまたは飛んでくるボールに対して体を動かすことを強く求めている。対談させていただいたGKコーチは、育成年代では特に身につけなければならない習慣だとも話してくれた。

ブンデスリーガの試合では、しっかり止まりボールに対して反応することで決定的な場面を防いでいた。簡単に失点しないことで、1部でも2部でも試合を締まったものにしていく。

②ジュニア年代では、日本との違いを試合のルールで見られた。

- ・オフサイドを取らない
- ・ゴールキックはなし。置いて蹴ってもよし、投げてもよし、パントキックもよし。
- ・バックパスはキャッチしても良い。また、一度手から放したボールを再度、取ることができる。

以上のプレーは本来、反則となるプレーだが、視察したジュニア年代では、全て同じルールのもと試合が行われていた。GKが、積極的に余裕をもってプレーをする機会が多かった。

③ブンデスリーガの2試合でフィールドプレーを行う回数が15回～20回近くあった。高いポジションを取ること、積極的にビルドアップに参加しパス&サポートを繰り返し行うことでチームを助けていた。

ゴールキーピングだけでなく、フィールドプレーができる11人の1人のGKの存在は大きく、ジュニア年代からのプレー機会は、大きな支えになっていると考える。

□まとめ

- ・各年代にて何を求めるのか、また、そのベースとなるのはどんな要素であるか。成長のスピードや身体差、特徴を把握し、必要なことを必要なタイミングで行うことの大切さを再確認した。
- ・ボールに対してプレーをすること、ボールを見て反応し、ボールへ体を動かすこと。
- ・技術の習得には、時間がかぎられている。しかし、適切なタイミングがある。

- ・ GKのプレー分析の必要性。キャッチできない理由は何。シュートに反応できない理由は何であろう。指導者は、現象だけをとらえずに上手くいかない要因をしっかりと掴まなければ、選手は同じプレーを繰り返してしまう。指導者のGK理解を上げることが、分析力の向上に繋がる。
- ・ キーパーの選考は、ネガティブな選考になっていないか。知らないうちにスケープゴートにできるようにしていないだろうか。また、GKのプレーしやすい雰囲気は作れているか。勝負を分けるポジションにネガティブな雰囲気を持ち込んでしまうことはいかがであろうか。世界では、能力の高い選手が行うポジションである。

□トピックス

ジュニア年代のバックパスを手でとれること、オフサイドがないことはGKに多くのプレー機会を与えていた。ネガティブな要因を少なくしてあげることによって余裕をもってゲームに参加できる環境づくりは、真似してみたいものであった。



3種への提言

小枝善憲、牧野安正(文責)

■基本技術の習得

U9年代からトップチームまで幅広く視察する中で、一番感じたことは、止める、蹴る、運ぶ、奪う、走るという5つの項目をプレッシャーのある中で、確実にすばやく行うことのできる技能が長けていた点である。

日本では、華麗な技術のある選手が重用させる傾向がある。特に、3種年代では新しい技術を身につけると指導者から褒めてもらえることが多い。選手は、自然とモチベーションが上がって更なる技術を身につける努力をする。勿論、そのことはよいことであるが、日本の華麗な技術とドイツの選手が身につけているサッカーに必要な技術には若干の違いがあるように感じた。

4種～3種では、身のこなし、コーディネーション、体幹など体づくりも必要不可欠であると感じました。サッカーを行うために必要な技術をまずはドリル練習で身につけさせ、それから対人の状態に対応できるようにしていく練習を徹底すること、3種の指導者たちが将来を見据えて必要な技術を身につけさせる努力をしていく必要があると感じた。4種～3種では、楽しみながら技術習得していくことや、選手のやる気に火をつけるような感覚を沢山養っていくことが重要であると考えます。

■ポジションの役割を教え込むこと

今回地元クラブ（7部リーグ所属）のU-9、U-10の練習を視察する機会があったが、私が小学生のときに行っていたようなフォーメーション練習を行っていた。右サイドバックがボールを持ったら、ボランチに当ててサイドハーフへ展開してそこからセンターリングを上げるというようなサッカーの基本的なボール運びを練習していた。そのため、日本の同世代で行われている団子サッカーにはならず、ドイツのU-9、U-10世代の子どもたちはサッカーをしていました。

最近小さいときからあまり型にはめないようにすべきであるという考えが日本にはあるような感じがするが、ドイツでは明確に教えていた。よく考えると私たちが小学生の頃に行っていたような基本的な練習をドイツでは実施していた。いくつかのパターンをドリル練習で身につけた中で、自分でいくつかの選択肢の中から選び、実行する流れを作ることが必要であると思う。ポジションの必要性、グループでの関わり的重要性を選手に納得させることができれば、2種年代にも通用する選手になると考えます。一貫したこだわりを持つことの重要性、シュートを強く打つとかパススピードを速くすることとかなどサッカーに必要なことだと思います。

■まとめ

4種、3種といった黄金世代と呼ばれるサッカー選手にとって大事な時期を指導する立場の人間は、サッカーに必要な技術や考え方を徹底的に教え込むことが必要であると今回のドイツ指導者研修に参加して再認識した。教え込むという言葉には、御幣があるかもしれないが、必要な技術（止める、蹴る、運ぶ、奪う、走る）と基本的な戦術を選手に浸透させるということはとても大事なことであると思います。

選手が成長していく中で、そのいくつかのセオリーの中で自分で判断して選択するという形をとることが最良であると考えます。指導の流れをつかむためにも、4種、3種年代が指導の一貫性を持てるシステム作りは勿論、教え込むべきことと考えさせるべきことの取捨択一を指導者ができるように指導の質を上げていくことが静岡県のサッカーの発展につながると思います。

サッカーの試合をもっと観る事。真似ること、楽しむことを選手も指導者も大人も日々感じていきたいと思っています。4種～3種～2種と個性のあるバトンリレーができるように日々精進していきたいと思っています。



3. 曜日別レポート (daily report)

8月21日 (日曜日)

報告者：牧野安正

ドイツ・デュッセルドルフ

■朝食(8時) デラク・リビングホテル

■試合観戦 (11 : 00) フォルトナU19 VS シャルケU19

(0-2)

0 (0-1) 3

得点 シャルケ 前半15分

左サイドからクロスボール、中央の選手がワンタッチで3人目の選手へ合わせ裏へ走りこむ選手がゴール右隅にダイレクトシュート

得点 シャルケ 前半37分

右スローインからFW選手がヘディングでそらして中央の選手が左足ボレーで2点目

得点 シャルケ 後半80分

FWの選手の個人技からサイドを崩して中央の選手が決めて3点目

<感想>

一見大味な試合に見えましたが互いのチームの良さ(ストロング・特徴)がみえた試合でした。タレントの差でサッカーのスケールが変わってくる。局面を個人で打開できる選手がいる。(シャルケ)

球際の攻防には見応えがありました。(手を使わない、腰から相手の懐に入っている) 両チームとも正確性には欠けるが、ボールスピードが速い。

<特徴>シャルケ

GKからの素早いフィードの速攻がパターンとして見られました。

サイド選手がボールを持つとFWを含む3人ぐらいの選手が裏を狙って走り込んでいる。

<特徴>フォルトナ

守備になる時、3ラインを整えているが、縦ずれ、横スライドに対応が遅れていた。

サイドを一発で変えられたり裏を取られたりして守備の甘さが見られました。

攻撃のアクションや人数をかけて攻撃することがすくなかった。

■試合観戦 (15 : 30) MSVデュイスブルグ VS ユニオン・ベルリン

(0-0)

1 (1-1) 1

得点 ベルリン 後半62分

右サイドクロスボールから逆サイドのFWが、ヘディングで折り返し中央の選手がフリーでシュートして決める。

得点 デュイスブルグ 後半67分

右スローインからサイドを崩してFWの選手が走り込み左足で決める。

<感想>

ドイツ杯1回戦 観客14,209人

まず、サポーターの大声援でスタジアムが盛り上がっている。ゲーム展開と共に自然と熱くなる空気感は最高でした。

ボールを奪いにいくことは、当たり前のように出来ている。(どこのエリアでも) 空中戦の強さ、体の使い方が上手い、視野の確保(ボールを持っている時の姿勢が良い) バイタルエリア内での迫力とゴールまでのイメージを感じとることができました。(選手間でのイメージの共有)がありました。

両チームとも、パススピードが速いことと、ターンが上手いと感じました。シンプルな攻撃ですが、誰かが、リスク管理のポジションをとっていてバランスの良さが見えました。正確なワンツーパスやグラウンダーのパスもレベルの高さを感じました。

■講義 (18:50)

講師/DFBシュトゥツプンクトコーチ:(シュルダー氏)トレセンコーチ=Aライセンス以上

○ドイツサッカー協会

- 1998年に育成プログラムをスタートさせた。
- 2001年 ユースアカデミーを設立、配置
- 2002年 タレント育成プログラム スタート
- 2006年 エリート学校 スタート
- 2008年 タレント育成プログラム 改革

○トレセン

全地域の育成

- ・366か所 - 50Km圏内
- ・46のプロクラブ(1部~3部)46クラブ
- ・29のエリート学校 (デュッセルドルフDFB認定エリート学校視察)

○ドイツ代表・西暦・戦績

EM(ユーロ)

WM(ワールドカップ)	WM2006	3位	
EM1996	優勝	EM2008	2位
WM1998	ベスト8	WM2010	3位
EM2000	グループリーグ敗退	EM2012	ベスト16
WM2002	2位	WM2014	優勝
EM2004	グループリーグ敗退		

※赤字は協会が育成から強化

○ライセンス

- ・プロサッカーコーチライセンス (UEFA, S級相当/プロサッカーチーム対象)
- ・A級ライセンス (UEFA, A級相当/アマチュア上位リーグ/ユース) (シュルダー氏)
- ・B級ライセンス (UEFA, B級相当/育成年代が対象)
- ・C級ライセンス (UEFA, B級相当)
- ・その他のライセンス (チームリーダー、キッズ、ジュニア、ホビー)

○トレセンの役割

- ・町クラブからユースアカデミーにつながる指導を行う

- ・選手の発掘/データーと試合視察の中で獲得していく。あくまでも指導者の主観。1番はスピード、2番はテクニックを持ち合わせている選手
- ・選手の育成
- ・指導者の育成（指導力の向上）
- ・地域とのコミュニティー、教育（エリート学校との連携、社会性を身につける）
- ・年2回協会から落とし込みがある
- ・年間何試合を観るか、全体で何を取り組むか、
- ・選手の課題の克服
- ・自分達の地域から多くの選手を上のカテゴリーにあげていく

ナショナル/U-19/U-17/U-15代表/プロクラブ/トレセン/町クラブ

*クロوزهヤカカウは、U-19から選ばれてきた。(5部6部リーグに所属していた)

*全地域の良い選手を、見逃さないシステムを確立させたいということ。

*キッズ年代、U-12年代で発掘育成していくこと。

- ・選手のデータ：年代ごとに基準を決める/A~C（90%Aでないとプロになるのは難しい）

<項目>

ドリブル/10m/20m走/ジグザグ走（アジリティー）/ボールあり/シュート:強さ>正確さ

8月22日（月曜日）

報告者：小枝善憲

■フォルトゥナ・デュッセルドルフ アカデミー講義

フォルトゥナ・デュッセルドルフがチーム強化のために大切にしている点は3点ある。

①スカウティング・・・地元を中心にスカウトしている

- ・成長を加味して行う。
- ・他クラブと所属更新がなかったU-17~U-19の選手もスカウティングする。

②育成

I（U-9、U-10）ベーシックの部分

- ・基礎技術の習得、ストリートサッカーの動き
- ・ボールコントロール
- ・2対2、3対3、4対4をゲーム形式で少数でのトレーニングを実施

II（U-11~U-13）1対1

- ・相手のいる中での技術の習得（フェイント・パス・シュート・ヘディング等）
- ・ポジショニング
- ・フィジカル・・・スピードを伸ばすことを重点的に行う
- ・自信を持たせる・・・勝利のメンタリティを勝つ経験を通して持たせる

III（U-14、U-15）グループ戦術

- ・システムの説明
- ・攻撃、守備における戦術の説明・・・例：前線からのプレッシャーのかけ方
- ・プレーヤに適したポジションを見出していく（複数ポジション）

IV（U-17~U-19）結果を求める段階

- ・シチュエーションに応じたサッカーができる
- ・ハイプレッシャーをかける。また、その中で戦う力を持つ。
- ・次のステップへのフィジカルトレーニングを実施する。年3~4回データを取る。

V（U-23、トップ）U-23、トップへ選手を引き渡す

- ・ポジションごとの課題の克服
- ・ストロングポイントの強化

③学校との連携・ケア

- ・心理テスト（ブンデスリーガが契約している専門家が作成）の実施
- ・人間性を高めるために生育環境を調べ、すべてを認め、個別のケアをする

■シャルケ04ユースアカデミー練習視察

- ・コンディネーショントレーニングを準備運動の中に取り入れていた。
- ・縦パスを入れて、落として展開するドリル練習を繰り返し実施していた。

■ミーティング

基本的なトレーニングを中心に行っていたが、止める・蹴る・運ぶという基本技術が確実に身につけている点について共通認識をもった。

8月23日（火曜日）

報告者：牧野安正

■朝食(8時) デラク・リビングホテル

■ドルトムント練習場見学（11：00）

■ドルトムントスタジアム見学（11：50）

■MEERBUSCH（メアブス町）地元アマチュアクラブ練習施設見学（16：30）

■地元クラブ FCブーダリッヒ1902

U-10トレーニング 指導者1名 選手11名

内容：ボールフィーリング、ドリブル&ターンダッシュ：2人組みパス：ポジション練習

印象：サッカーをしている。判断がある、止める、パス、シュート

■U-11 トレーニングマッチ（7対7）

感想：ルールがキーパーにバックパスあり、フィールドプレーヤ6人

後ろ3人 前3人の2ライン 団子サッカーになっていない。それぞれのポジションでサッカーをしている。守備では、ほぼマンツーマンになるので、ボールに行く選手それからマークとカバーをしている選手がはっきり分かる。

攻撃はシンプルにサイド、またはFWへ、前を向ければ仕掛け、シュートを迷わず打つ。指導者の目線、選手自身で考えてプレーしている。失敗しても触れない。声かけは、褒めている。トライさせている、見守っている雰囲気が伝わってきました。

8月24日（水曜日）

報告者：横尾 達哉

場所：1FCケルン、フォルトゥナケルン

10：00～本日の最初は、1FCケルンのトップチームの練習を視察しました。今回は、軽めのコンディション調整のため軽い負荷により短時間で終了してしまいましたが、多くのファンに囲まれて行われる練習風景は、日本ではなかなかみられるものではなく、チームを身近な存在に感じさせてくれる光景でした。

また、練習場には、FANSHOPも併設してあり、練習終了後に多くの人たちが足を運び、これが平日の光景であることから、クラブが地域のコミュニティーとして大きな役割を果たしていることを強く感じさせられました。

12：15～次のチーム練習時間の都合上、ケルンに市内にて少し自由な時間をもらい散策しました。平日の昼間でありながら多くの人々が行き交い、活気にあふれる街の様子は、文化の違い

を強く感じさせるものでありました。

16:00～次にフォルトナケルンの育成年代の練習を視察しました。キッズ～U17まで練習を見学することで、クラブとして大切に取り組んでいるものを年代のつながりを感じながら見ることができました。少し気温が高めではありますが、選手達は、意欲的に取り組んでいるようでした。

練習の中では、一人ひとりのボールを保持する時間は短く、前を向く速さやボールを速く前に進めるプレーが多く見られました。

GKは別メニューで行っており、年代別に必ず担当コーチが付きポイントを絞ったトレーニングを行っていました。U15 GKの担当である落合さんとディスカッションさせて頂くことができ、ドイツのキーパー育成における視点やトレーニングの意図、プレーの分析など多くの話を聞くことができました。



19:30～練習終了後、練習場に隣接するBARでU16コーチ杉崎さん、GKコーチ落合さんを囲んで夕食を摂りました。ドイツでの生活や仕事の話、改めてGKの指導法などたくさんのお話を聞かせてもらい親睦を深めることができ楽しい時間を過ごさせてもらいました。



8月25日（木曜日）

報告者：横山勝也

■朝食（8時）

- ・サンドイッチ/フルーツヨーグルト/ベーコン/スムージー/コーヒー

■DFB認定エリート学校（エリートシューレ）

H u l d a r - P a n k o k - G e s a m t s c h u l e 視察

講 師：フォルトオナ：クリスティアン・ラッシュ Christian Lasch 氏

ゲスト：アペルキャンプ真大選手（フォルトウナU17）

(1) 概要（エリートシューレのメリットとは）

- ・フォルトウナとしては4つの学校と提携しており、その中で2つがDFBの認定を受けている。
- ・11歳から16歳までが通学
- ・学校の中にフォルトウナの事務所がある。
- ・10名がエリート学校に所属している。
- ・学校や保護者と連携が取れている。＝授業の進捗状況などを確認し、コーディネートする
- ・最低限の学力を確保する。
- ・授業を速めに行ってもらったり、補習の対応もしてもらっている。
- ・サッカーに特化した学校で、デュッセルドルフからの支援とDFBからの両方からの支援を受けている。
- ・コーディネーション担当の指導者がいる。
- ・1週間で2時間～3時間はフォルトウナの時間があり、そこではトレーニングを受けている。
- ・他のクラブの選手やアマチュアのクラブで上手な子は彼の指導を受けることもある。

(2) 施設見学

- ・1面の天然芝

- ・土のグラウンド→人工芝にかえたい。
- ・日本同様学校の中でトレーニングができることが理想
- ・体育館も2つあり、一つはフットサルができる施設となっていた。
1つはコーディネーションを高めるフロアとテクニックを高めるフロアがある。

(3) 講義

① フォルトオナ：クリスティアン・ラッシュ Christian Lasch 氏の仕事

- ・毎日勤務している。他に3校に週1回
- ・今は週に1回のトレーニングだが、学校と話をしながら、練習の負荷を増やすこともコーディネートしている。
- ・学校で問題があれば、先ず自分が学校と話をし、自分たちが主体的に問題を解決していくようにしている。うまくいかないばあいにサポートに入る。
- ・育成のコーチとも連絡を取り合い、練習の状況、学習の状況を把握している。

② エリートシューレの役割 (学校・チーム・家庭との連携)

- ・人間性を重要視
 - ・学校の成績も重視
- サッカーに特化するだけでなく、文武両道できることが目的
- ・プロを目指す選手は、サッカーだけになってしまいがちなので、エリート学校では、学習をしっかりとサポートする。
- プロになれるのは1%、セカンドキャリアを含めて学習をさせることが必要
- ・ユースアカデミーの中でキャリアをサポートする人間がいて、進路について相談ができる。
 - ・他チームに引き抜かれた場合、その近くのエリート学校へ通う。
 - ・フォルトウナから外れた場合は、エリート学校へ通うことができるが、フォルトウナのサポートは受けることはできない。
 - ・サッカーは毎年12名の枠があり、その枠の中で受け入れる。
 - ・エリート学校に通うか通わないかの選択は保護者や本人の判断で決まる。
 - ・ただそれによってプロになれるかの保証はできない。

(4) アペルキャンプ真大選手への質問

Q：日本でのサッカーへの取り組みとフォルトウナでの取り組みの違い

A：日本では学校が終わり、三菱養和へ練習に言っていた。

今は毎週木曜日にフォルトウナの練習がある。

Q:学習は進めていたなければならないが、遅れてしまうことはあるか。

A:木曜日は2時間目からなので、音楽の授業は受けることができず、できない部分はフォルトウナにも、サポートスタッフがいてフォローしてくれる。

Q：1週間のスケジュールは？

A:日曜日：11：00 試合 (ブンデス)

月曜日：朝6：00起床 8：00～15：00 学校→帰宅

18：00 チーム練習 20：30 帰宅

※水金は月と同じ

火曜日：OF

木曜日：朝2時間学校でフォルトウナの練習 18：00 練習

Q : 通学時間は？

A: 家から学校 10分

家からフォルトゥナ 15分

学校からフォルトゥナ 20分

■フォルトオナU23・U19/18トレーニング見学

○W-u p

① ストレッチ・・・十分時間をかけて

② コーディネーション・・・マーカーを使って

・サイドステップ

・前後

・ジャンプ

・ステップからダッシュ

※どのカテゴリーも同じUP

※統一性があり、指導されている。

③4VS2

・少ないタッチ数

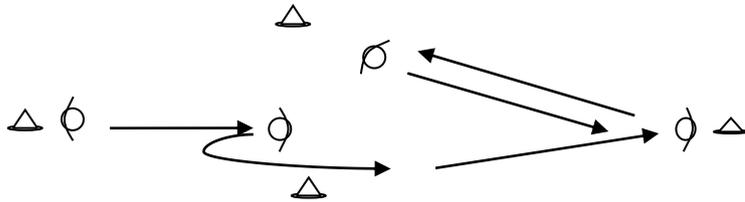
・ボールが強い

○T r 1

① CB→ボランティターン→トップ→落とし
シャープなパス・鋭いパス

ゴロでパス・・・次の人がプレーできるように
トップの当てる際、サイドが上がっている。

CB→SMF→ボランチ→トップ→おとし



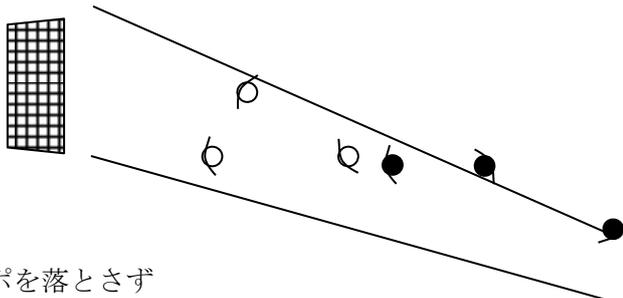
②CB→ボランチ→落とし→SMF→ボランチ→トップ

※ワンタッチ

落としの後、ボランチがずっと開く

○T r 2

トップを活かしたサイド攻撃



・テンポを落とさず

○GAME : 7VS7

■フォルトゥナU18監督との会食

・「3-3-1」と「3-1-3」

日本では一般的とされている「3-3-1」は選手にとってどんなメリットがあるか。なぜ「3-1-3」にしないのか。サッカーのフィロソフィーはゴールを目指すこと。3トップにすることで、攻撃に幅と厚みができる。目の前の勝利にしばられることなく、子どものためにトライすることが大切だ。

・「考えさせること」と「教えること」

今回のU18のトレーニングでは、前回の試合から出た課題「ボールを奪ってからのポゼッション」をクリアにするために、繰り返し、コーチングを行った。選手個人で考えさせる場面と、チームで統一した考えを持たせる場面があり、今日のトレーニングはチームとして共有・共感させるためのトレーニングだった。

8月26日（金曜日）

報告者：小枝善憲

■【ボーフム対ハノーファー96】試合観戦

ボーフム 4-4-2システム ハノーファー96 4-4-2システム

（前半）

- ・それぞれのチームに型があり、それを実践する技術がある。
- ・スペースがコンパクトである。
- ・ロングボールが正確で、そのボールを動きながらトラップしてドリブルできる技術がある。
- ・ゴールへの意識が高い。
- ・球際はお互いに激しいが、正当なタックルが多い。
- ・ボールを動かす型があるので、ボールの位置によって攻守ともに動き出しが速い。
- ・つなぐ時、蹴る時の判断が明確で、チャンスと見ればディフェンスの裏へロングボールを放り込む。
- ・FK、CKともに両チームがペナルティエリアへ全員が入る。
- ・スプリント力の高いプレーヤーが多い。
- ・全員が、止める、蹴る、運ぶ、奪う、走ることができる。
- ・お互いに得点を決めきる選手、FK、CKの精度に課題があった。

（後半）

- ・攻撃はシンプルであり、それをやり続けている。
- ・ハノーファー96はFK時の守備でラインを一直線にする。
- ・多少のファールにはクレームをつけない。
- ・フィジカルの強さがある。
- ・GKの質の重要性を感じた。決定機の阻止が多かった。
- ・ボールが止まっている時間帯が少なく、選手は動き続けている。
- ・90分間スプリントを続けられる力がある。

■ミーティング

ブンデスリーガ2部同士の対戦であったが、技術が高く、スピードもあり非常に見ておもしろい試合であるという印象を全員の意見で出た。プレッシャーのある中で、認知するスピード、そこに正確にパスを出す力が日本と比較した場合、最も大きな違いである。

また、そのスピード、正確性の違いはどこから生まれるのかについて話し合いをした。意見としては、フォーメーションが確立しているため、周りを見なくても位置で判断して味方選手

がいるという前提でパスを出しているのではないかという意見が出た。

ただ、周りを見るという習慣を身につけておくことは非常に重要な要素なので、育成年代を指導するときには繰り返し、指導していくべき点であるということをお互いに再確認した。

8月27日(土曜日)

報告者：横尾達哉

1 F Cケルンブンデスリーガ1部観戦、GEISSBOCK CUP

10:15～1 F Cケルン主催のGEISSBOCK CUPを視察しました。U9のカテゴリーのプロクラブアカデミーから町クラブの40チームが参加していました。まず驚かされたのが、飲食店のブースや用品販売などお祭りのような盛り上がりでした。また、車両の数も非常に多く、多くの選手やその家族、大会関係者で賑わっていました。さらには、救急隊員も常駐しており不測の事態への備えも万全でした。

レギュレーションとしては、5チーム8グループに分かれ20分1本7対7のゲーム。コートは、縦45M～50M×横35Mほどの大きさで、審判は一人で進行していました。ゲームの内容は非常に濃く、ポジションを意識したプレーだけでなく、迫力あるボールを持った仕掛けや状況を理解したシンプルなプレーなど“サッカーをする”チームが多くありました。

また、プロクラブアカデミーには、タレント候補といえる選手がいて、ゲームの中でも違いを見せる選手がいたことも印象的でした。

町クラブでもアカデミーチームに負けないプレーを見せ、勝負強さを発揮するチームも多く見受けられた。積極的なゲームが多く、お互いの良さを発揮する好ゲームがほとんどでした。

指導者は、ボールを持った選手への干渉は非常に少なく、良いプレーは見逃すことなく褒める姿は模範的で、また、保護者も選手を見守り好プレーに対して惜しめない拍手と歓声で会場を盛り上げる様子は印象的でした。



15:30～1 F Cケルン対S Vダルムシュタット98のブンデスリーガ1部の試合を観戦。

5万人の観戦者が来場しており、人が作り出す熱気は、熱さを増す一方でした。

結果は、2-0でケルンが勝利。開幕戦の難しさを改めて感じさせられた試合でした。

前半は、両チームともロングボールを使用しながら攻撃のスイッチをいれることが多くボールを蹴れる瞬間には、必ず裏を狙う選手がいた。成功する確率は高くないが、ゲームをコントロールするという意味では、効率的ではない気がしましたが有効だったのかもしれない。

ゲームにおいて相手の隙を見逃さないこと、または相手に付け入る隙を見せないことは、ゲームを有利に進める重要なポイントであり、原因を見逃しあいまいにすることの怖さを痛感させられる試合でした。

ドイツのGKのレベルは非常に高かった。11人の中の一人であるためビルドアップに参加する回数も多く、GKのポジションがDFラインの上げ下げに良い影響を与え、コンパクトなゲームを展開することができるのではと考えます。11分の1を実践できるキーパーはジュニア年代では、すごく少ないのが現状である。GKも“サッカーが上手い”を目指さなければいけない感じさせられる程、勝ったチームにも負けたチームにもよいGKがいるゲームは、中身が締まって面白かったです。

19:30~宿泊ホテルに戻り、近くの飲食店で夕食を済ませました。改めてこれまでの研修を振り返り、各々の今後の活動について意見交換し終了しました。



8月28日(日曜日)

報告者：横山勝也

■朝食(8時)

・サンドイッチ/フルーツヨーグルト/ベーコン/スムージー/コーヒー

■シャルケ04U17-フォルトゥナU17試合見学

K i c k O f 11:00

試合会場 シャルケ04提携のエリート学校天然芝ピッチ

試合結果 2-1(シャルケ04の勝利)

○得点経過

1点目(フォルトゥナ)

DFからの縦パスをボランチがターンし、トップに浮き球

トップがシュートし、そのこぼれを連動して走ってきたサイドが押し込む。

=前日練習でトレーニングと同じ形の得点

2点目(シャルケ04)

ボールサイドにフォルトゥナのDFが寄りすぎたため、バランスを崩し、中盤がフリーになる。そこからシャルケがトップに当てサイドに展開し、アーリークロスからファーサイドから走りこんできた選手がシュート

3点目(シャルケ04)

相手DFキープできず、シャルケがボールを奪いサイドへ、サイドがドリブルで駆け上がり、斜め左からシュート

DFついて行けなかった。=リズム変化

○試合全般

○W-UP

コーディネーション/ラン/スキップ/内転筋ストレッチ/大腿筋ストレッチ/体幹トレーニング

=統一性があり、チーム力を感じた。

○オフェンス

・サイドから展開するチーム戦術の中に、個人の戦術が見られた。

・駆け引きや判断、ドリブルの速さなど、場面場面で素晴らしいプレーが続いた。特にドリブルはトップスピードでもボールが体から離れることがなく、姿勢も背筋が伸びて自然と視野の確保ができていた。

・ビルドアップからサイドのスペースへの正確なロングボール

- ・ボールタッチ数は平均的に少ないが、個人戦術でDFをこじ開け、シュートまで持って行く場面が多々あった。
- ・ディフェンスの裏への飛び出しと連動した動き＝判断の速さ
- ・倒れない＝体幹がしっかりしている。
- ・強くスピードのあるパス
- ・後半になるとパスの精度が落ち、グランダーのパスも浮くようになってきた。
- ・徐々に間延びし、中盤にスペースが生まれてきた。
- ・個々のタッチ数が増えた分スペースが狭くなる

○ディフェンス

- ・高い位置からのプレス
- ・1VS2の形からワンサイドを切る場合でも、単純に詰めるのではなく、どちらも切ることのできるようなポジショニング
- ・体の入れ方が素晴らしい
- ・寄せる、止まるの判断がしっかりしている。
- ・GKの反応が素晴らしい

○まとめ

個々の止める・蹴る・予測するはほぼ完璧である。ゴールを目指し、ゴールを奪う。そのための逆算として、横パスから縦パスの供給、縦パスからのサイドへの展開、必要に応じてドリブル突破。トレーニングの積み重ねが生きていたと感じた。ディフェンスでは、ボールの奪い方、体の入れ方など、タイミングと相手の上体を見てのプレッシングが素晴らしかった。

一つ一つの動きを確認させながら、成功体験を積みませ、自己肯定感を持ち、プレーに臨んでもらいたい。

しかし、ブンデスの下部組織であっても、ボールウォッチャーになってしまい、中盤をおろそかにするという日本と近い現象もあった。日本でも改善できるようにしていきたい。

4. 事前研修レポート【テーマごとの事前学習】

横山 勝也 テーマ:育成と教育～グラスルーツからジュニア～

1 サッカー王国静岡の再建に向けて

「サッカー王国静岡」とは、各カテゴリーにおいて全国大会で優勝を重ね、多くの日本代表やJリーガーを輩出してきた。特に、高校サッカー選手権では静岡代表は常に優勝候補とされ、国立のピッチに立つことが当たり前となり、全国を制するよりも静岡を制することが難しいとも言われた。その強さの理由は、小学校年代からの指導の積み重ねにあると考える。現在、大切にされている「グラスルーツ」がこの時代に静岡にはあったと考えられる。

その頃は、小学校・中学校の教員が直接少年団や部活を指導していた。

つまり、学校教育とスポーツが一体となっており、指導者（教員）同士の縦・横の連携がとりやすく、お互いに切磋琢磨しながら、子どもたちのサッカーの向上を目指してきた。当たり前のように自分の通学している学校（近所）でサッカーを楽しむ生活があった。結果、誰もが同じようにサッカーを楽しみ、学ぶことによって、静岡県サッカー界全体が向上してきたと考える。

しかし、Jリーグがスタートし、サッカーがビジネスとして成り立つようになってきてから、静岡県にもクラブチームが誕生するようになり、指導者も教員から地域の指導者へ、そしてプロの指導者

が誕生してきた。

より自分の力や思いにあったクラブを求めようになり、子どもへのサッカーの環境が大きく変化してきた。以前は共有できていたサッカーの目標が、各チームによって異なるようになった。JFAがライセンス制度を設定したことにより、指導者の指導力の向上は見られるが、勝利至上主義が主流となり、強いチームに選手が集まり、弱いチームは選手数が激減している。結果、一人ひとりの特性を理解し、個を伸ばす、育てることというよりも、リーグ戦で、大会で勝利を収めることがチームの目的となっているように感じる。勝利＝強い＝良いチームとして保護者から評価され、良い選手が集まる。逆に個を育てることを主流として行ってきたチームはジュニアの年代では勝利はできにくく、保護者の意思でチームを移籍するケースが多い。

2 ドイツの学校教育とスポーツ

ドイツの学校教育のシステムは、図1のように日本のシステムとよく似ている。大きく異なる点が、小学校5年生から、学業を中心に進むコースと職業を目指すコースに分かれることである。日本でも小学校5年生からキャリア教育はスタートするが、ドイツのように明確にコースをわけることまではしない。どこを目指してこれから取り組んでいくかを早い段階で判断させるのがドイツである。

また、日本は基本的に「教師が子どもたちに必要なことを教えていく。」スタイルが主流であるが、ドイツでは「自ら課題をもち、その課題解決に向けて主体的に取り組んでいく。」ことが主流である。したがって、ドイツの学習では間違いがなく、子どもたちが自己肯定感をもって学習に取り組むことができる。今、日本でもアクティブラーニングなど、主体的に学習に取り組むことができる学習形態をとりつつあるが、学校教育のシステムが、スポーツに取り組む子どもたちのメンタルにつながっていると考えられる。

ドイツの子どもたちのスポーツへの取り組みは、すべてクラブチームでの活動となる。学校体育は週に1度程度で、その体育も日本のように「この学年でここまでできるようになる。」という目標はなく、やりたい人がやるという雰囲気である。学校は午前中で終わるため、午後は自分のやりたい習いごとに通う。うまくなりたい！

ために通うのではなく、あくまでも趣味の一環である。ドイツ社会自体が午前中で仕事が終わる国であるため、午後はみんなボランティアで活動をすることが多い。そこで、子どもたちの指導を行うのである。

日本の学校教育のように年間70時間から105時間の体育授業ではなく、ドイツの週に1度程度の運動経験しかないドイツがスポーツ大国であることを考えるとクラブチームの活動がいかに重要かがえる。

3 ドイツサッカーの育成について

1998年のワールドカップで準々決勝でクロアチアに0-3の大敗を記したドイツサッカー。2000年に開催されたヨーロッパ選手権でも大敗を記した。そのドイツが2014年のブラジルワールドカップで優勝した大きな勝因は育成、グラスルーツからの改革である。

ドイツサッカーのベースは「ツヴァイカンフウ」（1対1）である。この「ツヴァイカンフウ」は試合において重要な要素だが、それだけでは勝つことは難しい。

そこで、ドイツは改革のためにフランスの「年代に合ったトレーニング理論」を参考にした。まさにフランスとの共同作業だったといえる。

ただ、そのままをまねるのではなく、ドイツの長所を生かした育成を考案した。フランツやベッケンバウアーはどのように生まれてきたのか？その答えの一つがストリートサッカーだった。子どもなりに「どうしたら、うまくなるか。どうしたら、いいか？」を考え、新しいアイデアをひねり出し、新しい技術の習得に挑戦する。そんな子どもたちがクラブへ集う。プロの選手のようなプレーをし、

何よりゴールした瞬間の最高の気持ちをたくさん味わうために、子ども自身が成長してきた。

(1) ブンデスリーガ育成機関の義務化

2000年ドイツサッカー協会はブンデスリーガ1部のクラブに育成アカデミーの設立を義務化した。これが、ドイツにおける育成プロジェクトのスタートであったが、その裁量は各クラブに任されていた。改革のポイントとして

- ① プロクラブにおける育成分野の形式化
- ② クラブに合った理想的な育成システムの構築
- ③ お互いが切磋琢磨し成長する環境

→専門スタッフの常駐

- ・ 育成部長
- ・ 指導者
- ・ グ라운드環境
- ・ フィットネスコーチ
- ・ 理学療法士
- ・ 教育学、社会学、心理学に精通するスタッフを掲げた。

(2) フットボールエリートシュレー制度

ドイツサッカー協会は学業もおろそかにしない環境づくりにも力を入れた。ドイツ社会において大きなステータスとして評価されているのが、アビトゥーアの合格である。そのために、国内の学校と連携をとり、カリキュラムとシステムを構築した。

具体的には、必須科目であるスポーツの授業を受ける代わりに週に2～3回クラブから指導者を派遣し、指導を行う。また、遠征や試合が試験と重なった時は、フレキシブルに日時をずらすことができる。

そのシステムを管理するのが、育成コーディネーターである。育成アカデミーでは教育係をおき、宿題をサポートし、必要に応じ補習を行う。学業とサッカーの両立がこうしてはかられている。

(3) シュツットプункトの整備

元ドイツサッカー協会の会長、テオ・ツバンチィガーは「我々の基礎はドイツ全土にある2700に及ぶアマチュアクラブである。」と明言した。そこで、ドイツサッカー協会は「一人のタレントも見逃さない。」という強い決意でシュツットプункト(=トレセン)を導入した。366の地域にシュツットプункトを設置し、そこから才能豊かな選手を発掘する。シュツットプункトを見ながら、①トレーニングの意図②目的③注意点を説明する指導者向けの講習会も企画した。

○シュツットプункトが見定める「いい選手の条件」

①テクニク

- ・ 基本技術
- ・ プレーの正確性
- ・ プレッシャーの中での精度
- ・ 意図をもったプレー

②ボールをもった時の創造性

- ・ 両足が使えるか
- ・ 相手を意識した予測
- ・ 相手を驚かすアイデア
- ・ 状況にあった判断・決断力

③戦術理解

- ・オフザボールの動きだし
- ・ボールをもった時の動き
- ・攻守の切り替え

④フィットネス

- ・瞬発力
- ・体の使い方
- ・身のこなし

⑤その他

- ・モチベーション
- ・コミュニケーション
- ・リスクチャレンジ
- ・積極性と冷静さ

(4) 指導者の育成

グラスルーツの選手まで自国のサッカー哲学を伝え、浸透させることのできる指導者を育てる。

参加型の指導者講習を行い、プロクラブだけでなく、底辺層のアマチュアクラブにまで指導者を要請した。これが、グラスルーツからのハイブリット化の成功である。

4 ドイツ研修で学びたいこと

- ・学校教育との連携
- ・地域との連携
- ・4種における指導者養成の実態

これらを学び、再度、グラスルーツのシステムを構築し、サッカー王国静岡にとって4種の役割を明確にし、指導者に広げていきたい。

牧野 安正 テーマ:ドイツサッカー協会とブンデスリーグ

>20年前からの環境と取り組み

環境 ドイツW杯の開催が決定した頃から、スタジアムの整備が始まったこと

新設、改築、増築、最先端を走る設備が整えられた

UEFAが定める5つ星（ベルリン、ミュンヘン、ハンブルグ、ドルトムント、ゲルゼンキルヘン）ファイブスターを獲得し世界最高峰のスタジアム環境

平均入場者数は4万人を超える（女性客も全体の約3割を上回る）

ブンデスリーグのスリリングなゲーム展開が行われることで拍車をかけた。

取り組み ドイツサッカー協会が育成改革とファイナンシャル・フェアプレーの導入

ファイナンシャル・フェアプレーの導入を実施

クラブの経営を健全化させるための制度（収入を上回る支出をしてはいけない）

ドイツの多くのクラブが既に条件を満たしている。（バイエルンがお手本）

収入面について テレビ放映権料は91年の有料放送開始以来、右肩上がり続けている。ユニフォームの スポンサー契約料やスタジアムのネーミングライツ、スポンサー関連の収入。

>ドイツサッカー協会が育成改革に乗り出したのは2000年

1部と2部のそれぞれ18チーム×2=36クラブにユースアカデミーを持つことを義務付けました。クラブに育成のスペシャリストを配置して、選手たちが将来プロに巣立っていけるだけの環境と人間形成を重要なポイントとして取り組んだこと。

ブンデスリーガの育成システム（ローカルプレーヤールール）

ブンデスリーガに所属するクラブは、必ず12人以上のドイツ人を所属させないといけない。12人×36クラブのドイツ人が所属することができます。

小枝 善憲 テーマ:ドイツサッカーの進歩の歴史

ドイツサッカー協会は、1900年に設立された。1904年にFIFA創立メンバーとなり、1908年に代表チームを初めて編成した。1912年ストックホルム五輪に初出場した。その後、第一次世界大戦の影響で活動を一時中止した。第一次世界大戦終了後、帝政から共和制へ移行した中で、1920年から代表チームは活動を再開した。1934年にイタリアで開催されたFIFAワールドカップに初出場し、第3位に入賞した。その後、第二次世界大戦の敗戦、東西ドイツ分断などの影響があったが、国際大会において常に安定した成績を残してきた。1954年大会では、マジックマジヤールと呼ばれたハンガリーに決勝で勝利して初優勝を遂げた。これまでワールドカップでは優勝4回、準優勝4回、ベスト8進出は16大会連続という安定した成績を残してきている。2000年代中ごろまでは、安定した足元の技術と強靱なフィジカルを中心とした肉弾戦、ゲルマン魂とも表現される強靱なメンタルで勝利を収めてきた。ドイツは世界を代表する強豪国の一つである。

しかし、1990年代ごろから、国際大会では好成績を残すものの、ファンを沸かせるプレーが少ないブンデスリーガでは観客が集まらない現象が現れ始めた。そして、2000年ユーログループリーグ敗退という出来事が起こった。その頃のドイツサッカーには、時代遅れのイメージが定着してしまった。当時、ラルフ・ラングニックというドイツ人監督が「ドイツの練習は、8割が守備とフィジカル。残りの2割が攻撃だ。それをやっている限り、ドイツがずっと上に居続けることはできない」と主張した。そして、多くのドイツ人が「このままではまずい」という意識のもと、ほかの国からサッカーを学び、育成を見直し、ドイツは大きな転換点を図った。

いくつかの変革が行われた。ひとつは、トップの育成のためのエリート化である。ブンデスリーガの各クラブは育成アカデミーを持つことが義務付けられ、トレーニングセンター「シュトゥツプンクト」が整備された。才能ある子どもを一人残らず見つけられるためのシステムを作り出すことが目的であった。

同時に、現場レベルの指導変革も行った。攻めを控えて守備をやらせる決め事でガチガチになっていた育成から子供たちが自ら身に付けられるサッカーの育成に方向転換を図った。合言葉は「ストリートサッカーに戻ろう」だった。自由な場でなければ、創造性を持った選手は生まれない。技術とアイデアを意識した育成に方針を切り替えた。その実現のために指導ライセンスの仕組みを変えた。ライセンス講習では、意識の高い指導者しか来てくれない。「講習に行く時間がない」「そこまでしなくてもいい」という大多数の指導者の意識を変えなくてはならなかった。ドイツサッカー連盟は、自分たちから指導者に声掛けをした。

シュトゥツプンクトの練習は週に1回、各年代で行われているが、その日に講習会も一緒に開催し、町の指導者たちにシュトゥツプンクトの練習を見てもらい、その後で、シュトゥツプンクトの指導者は練習の目的や仕組みを説明する。そして、意見交換や講習会を実施する。町クラブから車で10分程度の場所で実施することで地元の指導者も気軽に顔を出せ、ドイツサッカー協会もサッカーに必要な情報を届けることができるようになった。

また、2004年から、ドイツサッカー協会はホームページで練習メニューの公開を行った。例えば、シュートと検索すると、アップ、メイン、ゲーム形式という一連の流れが表示される。その通りに練習を行うと90分で終わる。指導者の質により、練習の効果は変わることがあると考えられるが、

連盟から直接クラブへメニューを届けることで実践的な指導を行える仕組みを作ることはできた。

それらの変革により、ラーム、ゲッツェ、シュバインシュタイガー、ボアテング、シュールレ等の技術に優れ、創造性ある選手を育成し、2014年のワールドカップでドイツ代表は1990年以来24年ぶりに優勝することができた。

最近では、それに加えて組織的な守備とパスワーク、データを重視した相手に対して柔軟な対応をするサッカーをするようになってきた。また、中央ヨーロッパ、バチカン半島、トルコといった地域からの移民が代表選手になることも増えてきた。アフリカ系移民の代表選出も他国に比べると少ないがあった。

以上のような変革を行い、サッカーと真摯に向き合ってきたドイツは常に国際大会で上位の成績を残すことができている。これからも、他の強豪国と切磋琢磨していく中で、更に進歩することができると今回のレポートを作成していく中で感じる事ができた。

参考資料：サッカードイツ流 タテの突破力 中野吉之伴監修 清水英斗構成 池田書店
インターネット ウィキペディア ドイツサッカー代表

横尾 達哉 テーマ:育成とトレーニング

1. ドイツの戦略

ドイツサッカーの変革のきっかけとなったのが、1998年フランスW杯と2000年オランダ・ベルギー欧州選手権にのぼる。

代表チームが早期敗退だけでなく内容をも劣る試合をしたという事実が、ドイツ協会にとっては改革へと進ませる決断をさせた。

当時のチームは、平均年齢が高く、若手で期待できる選手が見当たらなかった。協会は、タレント発掘と選手育成のすべての面において改革を行っていくことになった。具体的には、ドイツ全土をカバーするトレセン制度、プロクラブの育成アカデミー導入、U-17, U-19 トップリーグ管轄のリーグ戦、エリートスクール、育成年代の強化、指導者養成と育成があげられる。

しかし、以上のことを考えた時に日本も同様なことを先駆けて行っていることもあれば、各国に負けないプログラムをもっている。しかし、大きな差を埋めるに至らないのかが、今回の研修にて少しでも実感できるのではないかと学びの意欲につながっている。

次に国内トップリーグに目を向けてみたい。ブンデスリーガには、ローカルプレーヤールールが適用されている。内容としては、12人以上のドイツ人選手の所属、8人以上はドイツ協会管轄のユースチーム出身者を所属させること。そしてトップチームに自クラブユースチーム出身者を4人以上在籍される。このことから国内選手、ユース選手の育成、重用が見てうかがえる。

また、協会とクラブとの連携により、代表チームの獲得賞金のうち50%が、代表選手を出したクラブへ還元される。フル代表や世代別代表選手を送ることで金銭的サポートも受けることができ、自国選手の育成にはっきりとインセンティブが与えられていることが、日本との違いの一つではないかと思われる。

ローカルプレーヤールールや国内リーグと代表チームとの連携により、さらに移民受け入れに寛容である国策から更なる才能が集まり、育成システムの強固な構築により2002年W杯準優勝に始まり安定した結果を生み出すことができ、期待された若手プレーヤーが続々と輩出されているのではないかと考える。

2. トレーニングメニューの構築

ドイツのフル代表は、一貫してひとつのスタイルを目指し続けてきたことは大きな注目点ではないかと考える。

発展させてきた哲学のもとトレーニングの目的や内容が確立され、育成年代の代表選手は特定のゲームコンセプトや戦略の理解、実行のための準備がしやすくなった。また、次のカテゴリーの以降がスムーズに行われるため、10代選手のフル代表入りの道も開かれた。

その中でも、トレーニングメニューは非常に体系的で、目的や内容が明確である。(メニュー表においては別紙参照)

ゴール前、ビルドアップ、フォアチェックやディフェンディングサードなどゲームで起こりうる状況でプランニングを行い実施していく。国として目指すものがはっきりとしているため、指導者側も選手側も歩みたい道や目指したものがはっきりと強いるのかもしれない。

3.

4. GKの育成

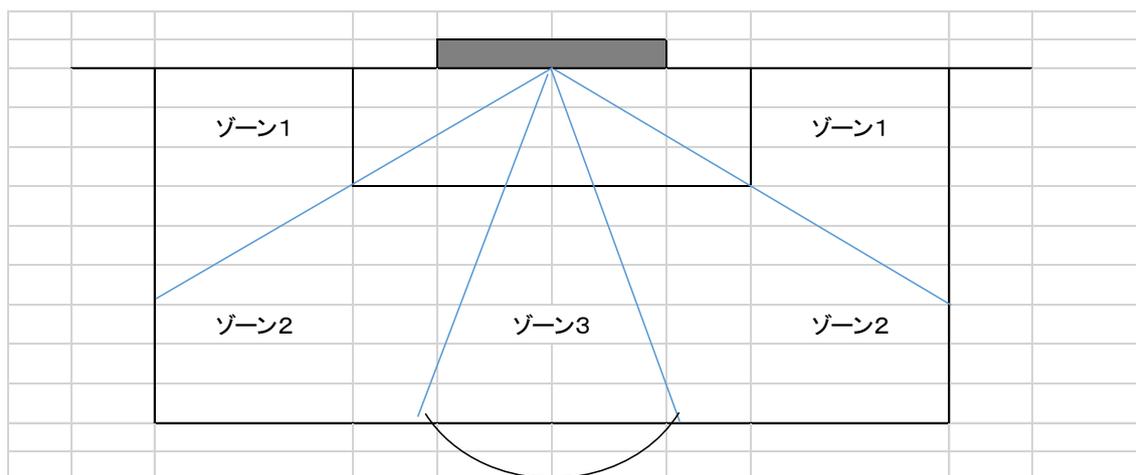
ドイツは近年、非常に優秀なGKを輩出している。代表に入らずともチームを支えどの選手も代表クラスである。

一番の大きな要因はペナルティーエリア内のポジションの体系化であるシュートコースを3つのゾーンに分け、シュート時のポジションの最適化を求める点にある。(別途資料参照) また、起こり得ることが理解しやすく、GK自身も整理しやすく早く技術の発揮につながりやすい。この点は日本でも広く深く語られない部分であり、この技術的なGK戦術の部分の理解により発揮すべき技術が早く正確になってくる。

そして日本では、指導者のGKライセンスができてまだ浅いが、広まっていくことで、現象だけでは判断できない技術的要素、戦術的要素、指導の構築が進んでいくと考えている

出典: 土屋 慶太 著 ドイツ流ライセンス講座/『世界王者』が明かす実践的トレーニング理論 2015年303P (ベースボールマガジン社) /屈辱から14年で世界ドイツサッカーの経営戦略 代表とトップクラブの一体性 2014年 並木裕太取材、日比野恭三文 株式会社 Wedge infinity Wedge2014年9月号

4. GKの守備に関して



- ゾーン1 GKはゴールポスト横、ゴールから離れる必要がない
必要以上に距離を詰めるとシュートに対する反応時間が減る
予測のし過ぎで誘い込んだり、片側を空けることは逆にリスクを高める
ボールとの距離が近づくとつれ重心を低く手を開く

- ゾーン2 GKが最適なポジションをとるとゴール幅は約3.5Mとなる
ダイビングの必要なく、ローリングダウンで対応
ゴールエリア付近まででコースを狭める
サイドへのシュートはローリングダウンで対応し、ディフレクトする
ボール状況によってはなるべくとゴールエリアから飛び出さない
- ゾーン3 GKが最適なポジションをとるとゴール幅が約4Mとなる
シュートをワンステップの踏み切りで止めることができる
ワンステップダイビング
GKはボールに近づくほどコースを狭めることができる
ボール状況によっては飛び出しすぎない
ドリブルする選手に対して飛び出した場合、相手の約3M前で止まりボールに対応する
ミドルシュートを打たれそうな場合、ゴールから約3M前に立ち、頭上を越すボールに
対応できるようにする。

5. 資料

Q & A (2015 ドイツ指導者研修より抜粋)

ボルシア MG U15 監督 ビョーン氏 (トップ・若年層のスカウトも兼任) 2015. 3/24

テーマ：ゲーム分析

(質疑応答)

Q：相手を踏まえた TR はどの程度やるか？

A：10パーセント程度。自チームのコンセプトの TR がほとんどである。(相手や試合の重要度により変わる)

Q：ネットワークシステムはどのように作っているのか？

A：ボルシアMGが専門会社と提携している

Q：決定力を上げるためには、何が必要か？

A：才能とサイズ。CFが出てくるまで待て (笑)。

Q：自チームのFWにどのようなコーチングをするか？

A：U15としてはサイズのあるFWだが、反転が遅いので、そのテクニックを身に付けるようコーチングしている。

オープンディスカッション ボルシア MG U15 監督 ビョーン氏 3/26 p.m.

(午前中はビョーン氏によるトレーニングセッション)

Q：静岡県選抜の印象は？

A：全体のレベルは低くはない。何人かの選手は良いレベルに達していた。

Q：練習中、選手を集めて話をする時、発問をよくしていたが、普段から行っているのか？

A：発問形式の手法はよく取り入れている。静岡の選手は指名されれば答えるのに驚いた。MGの選手は自分から発言する。それは協会も発信している。静岡の選手も積極性が欲しい。

Q：ドイツでは、90分のTrでコーディネーショントレーニングは取り入れているか？

A：トレーニングの最初に10分程度取り入れている。トレーニング外でもショートダッシュなどを取り入れている。

Q：U15年代では、できるだけ前からボールプレスをかける守備を学ぶのがいいのか、リトリーとした方がいいのか、その両方がいいのか、どう考えるか？

A：状況によって両方使えるようにした方がいい。守備側の人数が多ければボールプレスをした方がいい。そのために普通の学びと経験+パーソナリティで指導者自身の力を伸ばしていく必要がある。U15-19までのチーム監督はB級以上のライセンスが義務付けられているが、指導者は、指導ライセンスを取るときに、協会の指針や誰かの哲学をコピーするだけでなく、自分独自の哲学を持つべきである。

Q：ドリブルトレーニング、ゴールを付けたトレーニングをMGではよく見るが、ドイツでは主流なのか？

A：ドリブル・パス・コーディネーション・シュート+その週のテーマのトレーニング+ゲームで練習を構成している。このゲームでは、コーチは発言しないようにしている。

Q：ゲームフリーズはよくやるか？

A：よくやる。細かく伝えるようにしている。

2015.3/25 ポルシア MG U12 アシスタントコーチ ハンス氏

テーマ：タレントスカウティング（育成年代）

まずは昨日のTrについてディスカッション。

Q：トレーニングの流れは、3/24のようなものか？

A：基本的な流れは、①アップ②テーマ練習の導入③テーマ練習④ゲーム。日曜の試合でのケガ人が多かった。また、前回の試合でシュートに対する意識が低かったので、シュート練習の時間を多くした。

Q：相手なしのドリブルトレーニングについてどう考えるか？

A：アップ段階で相手をつけることはない。

Q：GKと一緒にトレーニングすることはどれくらいの頻度であるか？

A：火木金に全体練習に混ざる、月木はGK専用トレーニング（U12-14、U15-19合同）をする。木は1時間GKトレーニングをしてから全体練習に合流する。

Q：最後のゲームでは、コーチングがほとんどなかったが、常にそのようなスタンスか？

A：状況によって変わる。5月末のシーズン終了を迎え、選手の見極めに入っている。そのため、選手の様子をよく見ている。

Q：2004年以降の改革以降、

A：走る、闘うのみから、テクニック、敏捷性重視へ。また、今あるやり方+ポジションに特化した練習を加えていく。闘う、走るは前提。11人全員が戦う・走るを特徴としていなくてもよい。アカデミー施設の見直しを行い、専属のプロコーチをアカデミーに配置しなくてはいけなくなった。

Q：ドイツの闘争心、ゲルマン魂とは？

A：絶対に諦めないこと。物理的な痛みに負けないこと。例えば、接触プレーなど。

Q：コンタクトプレーはどのように指導しているか？

A：今のチームはメンタル的に弱いので、あえて厳しく要求しているし、ファールがあってもとらないようにしている。

Q：ゴールにこだわる姿勢（ゴールに歓喜・悔しがる）は普段から植えつけているのか？

A：12歳は子供。週3回のTR（シャルケ・ドルトは週4回）なので、クリスマス会や誕生パーティなどがあればそちらを優先させており、子供本来の楽しみなどを失わないように指導している。

Q：燃え尽き症候群のような選手は出るか？

A：ハンスが担当した中で、過去に1人だけ自分から退団を申し出た選手がいたが、ほとんどない。心理面をケアするスタッフがいる。

Q：毎年アカデミーから何人の選手がトップに上がるか？

A：1・2人は確実にいる。他チームと比べると多い。U19から2部や3部のチームに移籍することはない。トップに上がれない場合はU23（来季から3部）へ入る。自前のユース選手を7・8人プロ契約しなければいけないルールがある。

Q：日本でやるような1v1のトレーニングはやるか？

A：U11-13で重点的に行う。火=試合の改善 木、金のどちらかで1vs1は行う。5つくらいのレストランで行い、様々な形で1vs1を行う。

Q：シュート練習、ポゼッション練習はどれくらいやるか？

A：アカデミーの課題は得点力不足なので、シュート練習を多くやっていたのだろう。この時期はそうなりやすい。シーズン開幕当初は、新加入選手もいるのであまりやらない。ポゼッションはアップとテーマ練習の間に15分ほど組み込んでいる。

<ポゼッション練習の例>

6:2 8:3 10:4 時間は45秒でまわす。守備は奪ったら、ゴールへシュート

Q：選手を見る際、ハンスが大切にしている点は？

A：運動能力。テクニックは後からついてくる。トレンドとしてのテクニックの弊害として、テクニックを見せる選手が出てきた。サッカーの本質を知っている選手が必要。

Q：体格はスカウトする際にどの程度考慮するか？

A：MGは重視しない。アヤックスやドルトは大きい選手はいる。早熟な選手の弱点は、体格にまかせてプレーすることなので、まずは運動能力とテクニックを重視する。

Q：サッカーをする環境をどのように整えているのか？

A: 2004年以降ストリートサッカーの促進を行い、フットサルコートを無料開放し、サッカーを身近にさせる取り組みを行っている。また、2006年以降、ドイツW杯での収益をサッカーに還元するために、DFBがフットサルコートを1000か所建設して、ストリートサッカーができる環境を作った。

Q: 長谷部・内田はU12では発掘されなかった。ドイツでも遅咲きの選手はいるか？

A: いる。しかし発掘されない選手が出ないようにしている。

Q: 選手をスカウトする時、運動能力とテクニックのどちらをとるか？

A: U12まではテクニック。U14以降は運動能力。

Q: ポジションによって重要視する項目はあるか？

A: U12ではポジションを決めていないので、基本的には、上記4つを重要視する。上記4つとは、①テクニック②戦術理解度③運動能力④性格である。

A: テアシュテゲンやノイアーはU9ではFPだった。ある時GKをやらせたら、GKとしての資質を持ち合わせていた。GKもFPとしての能力も必要。

Q: 「決定力」に対する認識は？

A: CFを育てるのは歴史も必要だ。ドイツの情報サイトには、U9-トップの情報が載っている。そこには、得点王の情報が最初にある。点を取れば、上に行けるシステムがある。マリオゴメスは評価されなくなっている。

Q: U12年代で、早熟の選手にロングボールを蹴る試合展開はドイツでも起こるか？

(日本は8v8、ドイツは9v9)

A: ドイツでも起こりうる。その選手がロングボールの入った時にどういう決断をしているかを見る。MG目線では、そういう選手はなるべく取らないようにしている。ドイツでもU15で選手が育っていない問題はある。

Q: 「タレントを見る目」を養うために意識していることは？

A: 失敗例を繰り返さないように意識している。最近、特に社会性があるかないかを見極めている。不真面目な選手は攻撃の選手に多いが、チームにどう影響を与えているのかを見ている。

フォルトウナ・デュッセルドルフ瀬田さんとの事後連絡 (Q & A)

瀬田様

先程家に帰ってきました。このたびのお手配、微に入り細に入り、かつ真摯にご案内頂き本当にありがとうございました。予算の少な申し訳なく、かつ、経験値がばらついていましたので何回も同じような質問をしたり知識の浅さで失礼もあったと思いますが根気よく付き合っ
て頂き感謝申し上げます。何事も一步一步でみんなの力なくしては成就しない事はドイツのいまの成功が示しています。私もこれまで同様微力を尽くしていきます。

37度の夏に雷鳴轟きミズレ、ヒョウが降ることの解釈は日本との比較でなく、受け入れる以外になく、サッカーも人生もその様であると私は思っています。研修をどう生かすか、JJPの中身に劣らないものにしたいと思えます。ありがとうございました。

近い未来、その見識と達観で日本サッカーの為にも働いて下さい。引き続き宜しく願います。ありがとうございました。

取り急ぎお礼申し上げます。

池谷様

日頃よりお世話になっております。

無事にご帰国されたとのこと、安心いたしました。

また大変有り難いお言葉を頂戴し、誠にありがとうございます。

こちらこそ、今回は自分の中でも不足していた知識を多く得ることになり、大変有り難い機会となりました。

改めて知っているつもりで知らないこともあると感じましたし、知っているだけで見ていない感じていないと、説得力に欠けてしまうと痛感いたしました。

このあとに控える JJP の研修に向けて、私にとっても良い事前勉強の機会となったと共に、JJP よりもフットワーク軽く(ほかのクラブへも行くことが出来た)動けたことで、より多くのものを見ていただくことが出来たと思っております。

これを機会に静岡のサッカー界とももっともっと繋がりを作っていくことが出来れば幸いです。思っておりますので、今後とも何卒よろしく願います。

取り急ぎ、これをご返信とさせていただきます。

瀬田様

今更ながらで申し訳ないのですが、地域密着がクラブの基本ならドイツでは地域社会密着とはなにか? どうしたら地域密着ができるか瀬田さんの知るところをおしえてくれますか。エスパルスでいえば、スクール生が多いことが地域密着とはいえないと思えます。何故ならばヨーロッパではスクールはマイナーですし地域密着のキイではありませんから。スポーツの持つ文化性や人生観にも関わるものだと推測しますがエスパルスはどうしたら真の地域密着が果たせるのでしょうか? 時間があるときに教えて下さい。

池谷様

ご返信が遅くなり申し訳ありません。

この問題は非常に難しいと思いますが、ドイツにおいては、プロクラブとアマチュアクラブの果たす役割が大きく違います。

日本ではこのアマチュアクラブに相当する部分が学校における部活動(小学生レベルだと部活と言うのも難しいと思います)になるとと思いますが。

プロクラブとアマチュアクラブで大きく異なることとして、プロクラブには“アクティブ会員”と“パッシブ会員”の存在があるということです。

逆にアマチュアクラブにはほぼ“アクティブ会員”しかいないというところも特徴になります。

この“アクティブ会員”と“パッシブ会員”という概念を分かりやすく日本に置き換えて説明するとして例えば高校の部活動を例に挙げると、“アクティブ会員”は現役の高校生らに相当し、パッシブ会員はOBに相当します。

ただし、ドイツのプロクラブに所属する“パッシブ会員”らの誰もがすでに何もしなくなってしまっているOBばかりということではなく、場合によっては他のアマチュアクラブに属してスポーツをしていることも多々あるということです。

日本のJクラブが行っているスクール事業というものは、池谷さんのおっしゃる通りドイツにはあまりないため、置き換えて説明することは非常に難しいです。

ですが、「地域密着」という意味を、地域において住民から高いアイデンティティを得ること、と理解するのであれば、ドイツのプロクラブにおける“パッシブ会員”に当たる部分をいかに増やしていくかが重要なのではないのでしょうか。

JクラブはYSCCを除くすべてのクラブが株式会社である以上、営利活動を行うこととなりますし、スクール事業が大きな財源確保になっていることも否めないと思います。

一方でドイツのクラブはすべてが“フェライン”であり、基本的には非営利団体ということになります。

“非営利団体”の行っている活動を、“営利団体”の行うべき活動に置き換えることは本質として難しいと言わざるを得ません。

ですが、近年はJクラブもユースアカデミーを公益法人化したり、NPO法人化したりしているクラブが出てきていると思います。

そうすることでTOTOの助成金援助なども受けられることになるはずですし(もし認識が間違っていたらすいません)、スクール事業の月謝を下げたり、サッカーに限らず他のスポーツ、スポーツに限らず様々な習い事などをクラブがオーガナイズしていくことで、まずは大なり小なりアイデンティティを持った方々を増やしていくことが出来るのかもしれない。

正直なところ、これが回答ですということは絶対に言えないですし、そもそもそのようなものはないと思うのですが、その土地や習慣、風土に合ったやり方をしていくことが重要だと思います。

昨日、来独中のヴォルティス徳島の社長及び強化部長とお会いして話をしていましたが、徳島には私立が少なく、公立の学校がほとんどであるという話をされていました。

将来の進学を考えて、ヴォルティス徳島のジュニアユースから、公立の学校を選んで行ってしまうという悩みがあるとのことでしたが、これは都市部クラブとは全く逆のも現象かもしれません。

ご質問のお答えになっているかはわかりませんが、こういった概念を理解されることが一つ

重要なのではないかと考えております。

なお、この内容に近いテーマで論文を書いておりますので、正式に完成しましたら、ご紹介出来ればと思います。

引き続きよろしく願いいたします。

瀬田様

ご多忙のところ丁寧なメールありがとうございました。

昨日から泊りで普及部のスクール、ジュニアユースコーチ 35 名の研修がありまして、帰国後(大急ぎのやっつけ仕事でしたが)間に合うように P P と映像を作りレクチャーしました。その中で地域密着の話も取り上げコーチ全員でディスカッションしました。ドイツとは異なるまさに日本的、地域的な特徴が出たディスカッション内容でしたが、ドイツでの瀬田さんのお話をつなげてまとめることができました。また研修の最後にメールで瀬田さんから頂いた地域密着に関するご意見を全員で共有させていただきました。その前のスクール活動の 5 つの拠点での成果発表の中で、エスパルスの施設の(場の)提供による人集め、ファミリー化の促進という話ができましたのでちょうど良いタイミングで地域密着のありかたについて瀬田さんのアドバイスを披露することができました。見えなかったものがおぼろげに見えてきた今回のドイツ研修の濃さをあらためて感じています。

アイデンティティという言葉のニュアンスはむずかしいですが、ファミリー化という言葉に置き換えますとエスパルスではわかりやすく思います。アイデンティティの持つコンテクションをさらに皆が理解して、地域密着とはどうすることかについて考えてくれると思います。

パッシブ会員、アクション会員についてはドイツで聞いていたはずなのですが、必要に迫られたことで理解を深めることができました。また、アマチュアスポーツ・非営利事業でなく、営利事業を旨とする団体が地域密着を成功させることのむずかしさも合点がいきました。

パッシブ会員制度は非常に有効なものであると思いますし、サッカー以外の他を巻き込んだアイデンティティの浸透などは、静岡の地域性、地域のサッカーの浸透度を考えながらエスパルスでも出来ることはあると思います。いろいろアドバイスいただいづいぶん腹落ちしました。有益なアドバイス、ご意見にあらためてお礼申し上げます。ありがとうございました。論文も楽しみにしています。引き続きよろしく願いいたします。

池谷様

ご丁寧なご連絡をいただきまして、誠にありがとうございます。

私は指導者としての立場ではなく、あくまでもマネジメント目線での話が中心となりますが、だからこそ、また皆様とは違う視点でドイツ現場を捉えていることもあるかと思えます。

一方で池谷さんをはじめとする指導者の皆様は、やはり普段の日本の現場と、今回視察していただいたドイツのサッカー環境、トレーニング状況や、そのほか多くのシーンから、指導者のエキスパートとして多くの情報を得られたのではないかと考えております。

営利、非営利というのは、とても難しいテーマだと思います。

横尾さんが、「限りなくボランティアに近いと思っていた自分たちの活動も、ドイツの姿と比べると、知らず知らずに営利的な活動になっていることに気付いた」とおっしゃったのが印象的でした。

日本はアメリカナイズされ、商業目的のサッカービジネスが主流となっています。

それにほとんどの人が疑問を持たず、その手本とするためにドイツのスポーツ環境を見にきて、参考にしようとしています。

しかしドイツのそれは、ほとんどがボランティアに支えられて成り立ってしまっているということになるわけです。

そして皮肉にも、そういったマンパワーは、日本では部活動に存在してしまっているということになるわけですね。

この堂々巡りのような思考の中で、日本に合ったものを作り出すには、まずはドイツが上手くいっている理由と、その本質的な部分を理解することが重要です。

そういったことを、今回皆様にご滞在中に、実際に目で見ていただくのと並行して、私なりに伝えたつもりしております。

百聞は一見に如かずと言いますが、私は百聞と一見で真実に近づけると 생각합니다。

池谷さんのように、指導者として教育者として、そしてクラブや学校現場で多くの経験をされた方々が、正しい理解をしてくださることが何よりも重要だと思います。

だからこそ今回のように、(迅速に)素晴らしい内容のフィードバックを日本で活用していただけていることを嬉しく思います。

また何かお力になれることがございましたらいつでもご相談ください。

微力ではございますが、ご協力させていただければ幸いです。

今後とも何卒よろしく願いいたします。



ドイツと日本のサッカー



ドイツの育成改革
 ・1998年W、C、2000年ユーロでの惨敗を機に2006W、Cに向け育成改革を始める
 ・守備主体、体の強さを生かしたサッカーの見直し
 ・フランスの育成などを参考

summerise

- 地域密着・・・これなくしては何も始まらない
- みんなで・・・ひとりでは何もできない
- イノベーション・・・change, never change
- ゲームとゲームから逆算した基礎基本を大切に
- 楽しいからこそ・・・「うまくしてあげる」より「楽しい」から
- ストリートフットボール・・・サッカーの源流を忘れずに

地域密着

地域密着の姿

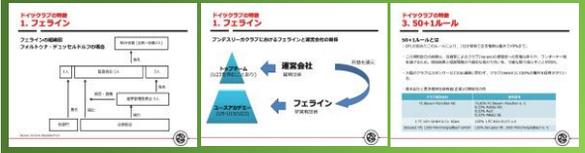
- ・・・地域密着って何？
- ・・・地域へエスバリスはどんな発信をしていてその発信がどのような成果を上げているの？

練習の成果を選手やアキアツの役員、OBに相当する関係者をパトリアン会員として登録しアイディアを共有する。賛助団体と非賛助団体にとっての地域密着のニュアンスは同じではない。様々なスポーツ、団体も取り込みアイデンティティを広げていくことが必要。それぞれの地域の歴史、文化、特性に合わせた最良のものを見つけ出す。

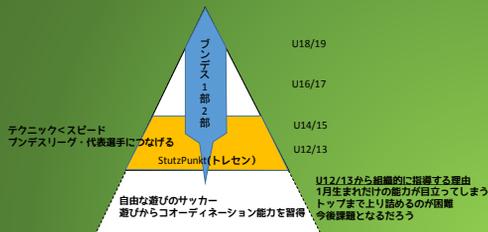
ドイツクラブの特徴

フェライン Verein

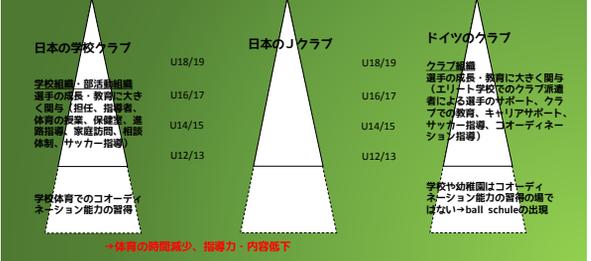
- ・プロ・アマ問わず会員による協会組織で成り立つ。非営利団体・公益団体として活動
- ・自分の声が響くクラブ
- ・トップチームの運営会社が利益をフェラインに還元する
- ・1社が保有できる株式は49%まで。51%以上の権利を保有できる例外クラブは、レバークーゼン、ヴォルフスブルグ、ホッフェンハイムの3クラブ
- ・フォルトゥナの場合会員は約20,000人



DBFによるタレント育成



日本の育成、ドイツの育成



StutzPunkt(トレセン)

意図目的

- ・プロクラブに所属しない年代、所属しない選手の発掘と育成
- ・タレントの見落とすをなくす。クローゼ(5部で20歳までプレー)、カカウ(6部でプレー)を出さないために
- ・フンデスクラブ、代表につなげる指導
- ・所属チームで不足していることを補う
- ・週1回の活動、重でもリアルタイムに呼べる
- ・テクニク<スピード
- ・テスト項目で選手のパフォーマンスを管理…モチベイト、補助的な指標

2. DFBによるタレント育成

2. DFBによるタレント育成

DFBの組織的システムアップグレード(DFB)が推進していることにより、ドイツのサッカー界は、世界をリードするレベルに到達している。

DFBは、ドイツのサッカー界をリードする。DFBは、ドイツのサッカー界をリードする。DFBは、ドイツのサッカー界をリードする。

StutzPunkt(トレセン)

Lecture Mr.Swen

- ①タレント発掘
- ②選手重視
- ③思い切りシュートを打つことを優先→シュート能力の向上、G Kが育つ
- ④for checking 専らいくサッカー

2. DFBによるタレント育成

DFBの組織的システムアップグレード(DFB)が推進していることにより、ドイツのサッカー界は、世界をリードするレベルに到達している。

2. DFBによるタレント育成

DFBの組織的システムアップグレード(DFB)が推進していることにより、ドイツのサッカー界は、世界をリードするレベルに到達している。

2. DFBによるタレント育成

DFBの組織的システムアップグレード(DFB)が推進していることにより、ドイツのサッカー界は、世界をリードするレベルに到達している。

日本のStutzPunkt(トレセン)

目的 ?

方法 ?

エリート学校

Elite Schule

Fortuna Dusseldorf1895 e.v.の場合

4つの提携校(2つのエリート校) クラブからコーチを学校に派遣し学業サポートとTR

2. DFBによるタレント育成

DFBの組織的システムアップグレード(DFB)が推進していることにより、ドイツのサッカー界は、世界をリードするレベルに到達している。

アベルカンパ - シンタの1週間

日:11:00 U17ブンデスL
月:6:30起床、8:00-16:00学校、18:00TR、20:30帰宅
火:off
水~金:月に同じ
土:TR11:00

GAME watch

ドイツ杯:
ユニオン ベルリン VS MSVデュイスブルグ

ブンデスリーグ:
VfL.ボーフム VS ハノーファー96
1. FCケルン VS ダルムシュタット

間断なくゴールに向かうプレー
シンプル
スピード
力強さ
最初のプレーを前に
すばやいパス、すばやい動き
少ないタッチ
正確なパス
球際の強さ(相手の自由を奪う、阻止する)
プレーフォームを崩さずプレー(姿勢、体幹)
サッカーを愛する人々

GAMEの印象

全体
責任あるプレーと規律(ボール、チーム、勝利)

攻撃
シュートがうまい
オンがフリーなら背後にフリーランする
ポジションプレー
間断なくゴールに攻めあう。スピーディーでシンプルで力強い
立ち姿、プレーフォームがよい。無理な体勢でプレーしていない

守備
寄せる。簡単に飛び込まないが少しでもコントロールをミスしたら奪う
GKがうまい

FC Budenrich

アマチュアリズム（精神）からの出発がドイツサッカーの底流
 スポーツを愛する気質、人生を大切に生きる人生観が根底にある
 地域住民にスポーツの機会を提供する
 地域コミュニティを育む場
 地域に密着したアマチュアクラブ



フォルトウナ・Dの育成



U9-U10
 昔からあったもの
 ストリートフットボール
 様々な動き
 2対2, 3対3, 4対4, バリエーション、スモールゲーム
 止める、譲る、運ぶ、シュート

U11-U13
 守備
 相手がいる中で1対1の技術
 フェイントターン、パス、シュート、ヘディング
 1対1の戦術
 正しいプレースタイルの選択
 フィジカル成長を促す
 スピード
 自信を持たせる
 成功体験、勝者のメンタリティ
 サッカーで生活の中心に置

U14-U16
 フルーフットボール
 システム
 細かい戦術
 状況に応じた戦術
 ポジションの適性を見極める

U17-U19
 組織
 シチュエーションにおける戦術
 ハイプレッシャーの中で正しいポジション取りと技術の発揮
 正しいフィジカルTR
 筋力の状態などの測定

Lecture:
 アカデミーS ガイデクター・U23監督 タシュ氏

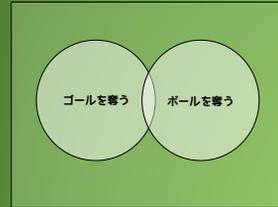
SDFのスクール&SSチーム

Bitte,教えてください

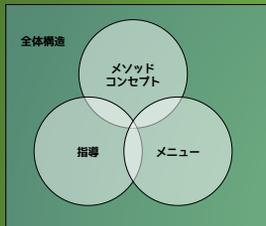
スクール指導のコンセプト
 レッソンの流れと内容
 U6,U8,U10,U12のTRコンセプトと練習内容
 指導上の課題と解決

SSチーム指導のコンセプト
 1週間のTRのテーマ
 TRの流れと内容
 U13のTRコンセプト、U15のTRコンセプト
 指導上の課題と解決

サッカーの目的



何を知るか、何をつくるか

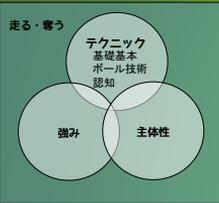


何を習得させるか

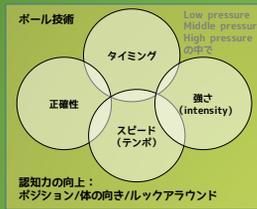


何を伸ばすか

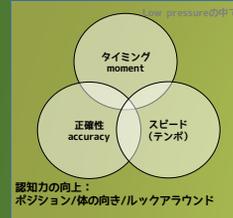
個の幹を太くする



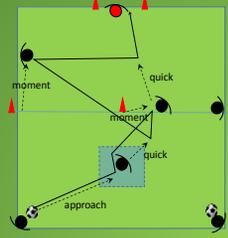
プレーのクオリティを上げる



ドリルにリアリティを持たせる

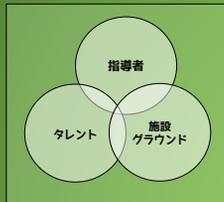


テンポ、正確性、タイミング



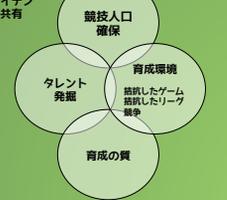
何がキイか

クオリティ



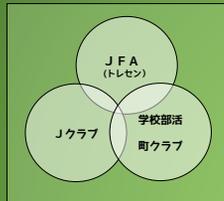
何が問題か

地域密着:
クラブのアイデン
ティティの共有



何を構築するか

効果的育成組織



知識とフィールドワーク

生の情報 両輪と一具

EX. ドイツでは子どもたちに思い切り強くシュートを打てと言っている
・・・GKが育っている

Intelligence(知性)

知能(ものを考える能力) + 情報集積 + 経験値

Art と Logic

罫子を開けよ。外は広いぞ・・・直接生で見ると、体験する大切さ

生の情報

百聞と一見

2016ユーロ(51試合)	2030年	優勝の良さ…ドイツリーグ
70.2%	1人/20人	
19.1%	40,000人	
10.6%		
30%		奪いに行くサッカー
小国のカウンターアタック	2016年	世界基準
小国に一人のスターがいれば優勝候補！？	173 cm	勝利へのこだわり
	180cm	基本技術・戦術の大切さ
		意図を持ったプレー

育成成功のキ

1. 競技人口確保 (グラスルーツ)
2. タレント…発見、育成、評価選考
3. 指導者…専門家、指導者ライセンス、選手としてのキャリア、学び
4. 施設…グラウンド、トレーニング施設、その他施設
5. 選手のサポート (教育・キャリア)
6. 組織構造…効果的組織

クラブと指導者がそれぞれのよさを取り込みながら



GAME から逆算してテクニックを教える

Main dish は Game

ゲーム上手、トレーニング下手？
トレーニング上手、ゲーム下手？
トレーニング上手、ゲーム上手！

コーディネーション
テクニック
シュート
シミュレーションドリル
ゲーム

FC BUDENRICH VS SV ROSELLEN



教育とサッカー指導 = 基準を示す

教育

1. 人としての人間教育、人格形成へ関与。しつけ
2. キャリア教育 (進路指導、職業指導、資格取得etc)

サッカー指導

Method/Concept → teach/coach/motivate/help
発育発達に合わせた体系的指導/個別指導
テクニック/戦術/フィジカル/メンタル
Teaching Skill(指導力)
Menu Quality (メニュー力)
Observation/Analysis (観察・分析)

観る練習【やる練習・考える練習】

子どもは大人の振る舞いを見ている

子どもは大人のサッカーでのプレーと振る舞いを見ている

子どもは大人の真似をする

では、子どもを大人にするのがサッカー指導ではないか

団子サッカー

ドイツの子どもの試合の様相は「団子サッカー」じゃない (U8-U11)
ボールを持ちすぎること視野を失いボールを失う子どもが多い
やみくもにドリブルしボールを離さない子どもが多い
ボールをパスしながらゴールを目指す子どもがいる



コーディネーション（神経・筋の協働） ライフキネティック（脳トレ）

脳内ドーパミンの分泌を促す
見て反応する

プログラムに促ったコーディネーショントレーニング（ATHLETIC）
専門的トレーニング（SPECIFIC）



オリジナルなクラブをつくる

多くの情報、画一化された情報からどのようにエスバリスを差別化するか

自分たちのやり方を決める・・・自己決断

- > 人的クオリティ+ファミリー・・・組織力
- > 地域のサッカーカ・・・タレント人口
- > 地域サッカーコミュニティとの密着・・・クラブの原点
- > 地域密着・・・営利を果たしながら非営利的に
- > 一言指導・・・指導の原点
- > 地元出身の選手、スター